◎インタビュー

戦後日本学問史の証言①

東大・日本近代史研究会・部落問題

川村善二郎氏に聞く

今西一
［小樽商科大学商学部教授］

ARENA
2010

はじめに

川村善二郎氏は、日本近代史（特に部落問題）の研究者として高名であるが、今や服部之總氏を代表とした日本近代史研究会（近研）の全体像を知る、数少ない一人である。川村氏は、このインタビューのなかで、自分を「フリーターの先駆者」と語っておられるが、最近使われている言葉で言えば、「高学歴ワーキングプア」ということになるだろう（水月昭道『高学歴ワーキングプアー「フリーター生産工場」としての大学院』光文社新書、二〇〇七年）。氏は、現在の大学進学率が同世代の五〇％を超える時代[1]と違って、四％しかない時代に、旧制高校、東京大学という超エリート・コースを歩みながら、一度も定職に就くことなく「在野」で研究を続けてこられた。

今の超就職難時代の若者たちには理解できないかも知れないが、「在野」の研究者というのは、私たちの若い頃には一つの憧れであった。私も四〇歳ぐらいまでは、「在野」をきどっていたが、日本では企業や大学に所属していなければ、同一収入でも三倍ぐらいの差別を受けると言われている。実際に経験してみると、住宅費、医療費、ローンの金利等々、三倍ではきかない格差である。私の能力の無さを知っている周囲の先生たちが、「大学院に行かないか」、「学位を取ってくれないか」などと、破格の待遇を受けて定職に就くことができた。しかし、今や多くの私学は倒産の危機に直面し、国公立大学もいずれは民営化され[2]、「楽園」は崩壊する前夜になってきている。

現在、特に人文系の研究者は、「不安定なインテリ」（モナ・シュレ「フランス『下流インテリ』たちの現実」阿部幸訳『ル・モンド・ディプロマティーク』日本語電子版、二〇〇六年五月号、ほか）と呼ばれているが、川村氏の時代もまたそうであった。氏が尊敬している、大歴史家服部之總氏でさえ、正規の大学に就職したのは晩年の数年間だけであった。しかし、彼らは日本近代史研究会という在野の研究会を組織し、『画報』の刊行という先駆的な事業を行なっている。この近研につ

いて、近年、色川大吉氏が、『カチューシャの青春』（小学館、二〇〇五年）という自伝のなかで、「絶対主義者」服部氏への批判を書き、賃上げ運動を行なったことなどを暴露している。川村氏は、この色川氏の回想には、いくつかの行き違いがあったと語っている。

それにしても近研には、川村・色川氏をはじめ、遠山茂樹・小西四郎・青村真明・藤井松一・宮川寅雄・吉田常吉・松島榮一・村上重良・原田勝正・松尾章一・竹村民郎・北島正元・佐藤昌三氏など、常に「同人」として十数名以上の多彩な人材が集まっている。また「客人」としては、奈良本辰也・吉澤忠・藤田経世・三上次男・和島誠一・三笠宮崇仁・川崎庸之氏などが参加していた。ここでは、『画報』という先駆的な仕事がなされていたが、川村氏の話では、当時は絵画や写真資料が、それほど意識して取り扱われたわけではなかったそうである。しかし、『画報』は爆発的な人気があり、よく売れた本ではあったが、その印税収入は最後まで明らかにされなかったそうである。

川村氏の人生で、もう一人大きくかかわった人物に、義父植木徹之助（僧名、徹誠）氏がいる。植木氏は、一八九五（明治二八）年一月二一日、三重県度会郡大湊町（現在の伊勢市）に生まれ、小学校を卒業して、東京の御木本真珠店で働いた。弟の保之助氏は、兄は「若いころ、御木本の工場に行くと、賛美歌を歌っていた。次に会った時は、ちょっと外に出ようと、普選演説会に連れていかれた。その次に会ったら労働歌を歌っていた」と述べているが、これに息子の等氏は、「もしこの頃、（三重県）朝熊に来ていたら、昼に経を唱え、夜にはインタナショナルを口ずさむおやじの姿に、また驚いたことだろう」と、その波瀾万丈の生涯を語っている。

植木等氏は、「キリスト教、社会主義、親鸞思想と、おやじが次々、思想・信条を変えてゆく時、あまり深刻な内面世界の相克などなかった様子だったと、いう人が多い、たぶん、そうだっただろうと思う。おやじの関心事は、いつも現実社会の人間だった」と言っている。おやじは「潔癖な理論家ではなくて、おおらかな実践家だった」と言うのである（植木等『夢を食いつづけた男』朝日文庫、一九八七年、一二四頁）。その徹誠氏が、三重度会郡四郷村大字朝熊区（のちの伊勢市朝熊町）の三宝寺説教所の住職として、被差別部落の入会権差別に反対する、世に言う「朝熊闘争」の指導者になる。そして、一九三八（昭和一三）年の三重県人民戦線事件で、徹誠氏は治安維持法違反で逮捕されている。この朝熊闘争については、川村氏の「ファシズムと部落差別――三重県朝熊部落のたたかい」（『部落』第二〇巻三号、一九六八年）という名論文があり、近年では黒川みどり氏が『地域のなかの部落問題』（解放出版社、二〇〇三年）のなかで取り上げている。

このインタビューは、二〇〇九年一二月二七日、東京都の西武新宿線の西武柳沢駅前の柳沢図書館で行なったものである。川村氏のお連れ合いの真澄さんが、前々日に倒れられるという最悪のコンデションのなか、「遠方から来たのだから」と、昼食をはさんで五時間以上のロング・インタビューに付き合ってくださった、川村氏の人間的な暖かさには、ただただ頭がさがる思いがする。また、本稿の作成には、テープ起こしをしてくれた、北海道情報大学講師の天野尚樹氏や、原稿修正を手伝ってくれた北大スラブ研究所の井潤裕氏らのご助力があった。記して感謝したい。

註

（1）大学進学率五〇％と言っても、男性六〇％、女性四〇％というのは、先進諸国のなかでは異常な数字である。日本の男女差別の強さは、ここにも現れている。

（2）二〇〇六年三月、財政制度等審議会は、二〇一五年までに国公立大学の授業料が二〇〇万円を越える見通しを公表している（白石嘉治『不純なる教養』青土社、二〇一〇年、四二頁）。現在でも国公立大学の授業料は、初年度一〇〇万円に接近しており、学費ローンの導入など、大学への銀行資本の介入が強まってきている。

川村善二郎氏へのインタビュー

聞き手◎今西一

1　生い立ち——相撲部屋の親戚

今西　本日は、東大時代の思い出や、服部之總さんとの出会い、日本近代史研究会の思い出、また部落問題研究などについて、お聞きしたいと思います。まず、お生まれは何年ですか？

川村　一九二八（昭和三）年一一月一日、戸籍上です。本当は教育勅語と同じ一〇月三〇日に生まれたらしいのですが。小学校に入ったのは一九三五（昭和一〇）年です。

今西　どこでお生まれになったのですか？

川村　生まれたのは岐阜市です。両親とも岐阜の出身です。家は江戸時代から呉服屋をやっていたようですが、一八九一（明治二四）年の濃尾震災の打撃で傾いて、ぼくが生まれる頃には、というよりすでに大正期には、伊奈波神社という岐阜の地元の御宮がある伊奈波通りで、小間物屋をやっていたらしいです。ぼくの従姉などはそこで生まれました。その店を守っていた川村の祖母が一九二八（昭和三）年の秋九月に亡くなりました。

今西　おばあさんのお名前は？

川村　会ったことはないのですが、ひさの、といいます。

今西　おじいさんは？

川村　ぼくと同じ善次郎です。字は違いますが。祖父は濃尾震災後の店を再建できず、大正の中頃一九二〇（大正九）年六月に亡くなり、祖母が小間物屋をやっていたのです。その祖母が亡くなった頃、ぼくの父は東京の新橋演舞場に勤めておりました。

今西　お父さんのお名前は？

川村　源八郎です。

今西　お母さんは？

川村　サトです。同じ岐阜の大工の棟梁の娘です。川村の祖母が亡くなって、葬儀のあと小間物屋をみる人がいなくなったので、母が大きくなったお腹を抱えて岐阜に行くことになり、ぼくはそこで生まれたのです。ですが、父は新橋演舞場に勤めておりましたから、母は一年ほどで店をたたんで、東京に帰ってきました。

今西　東京ではどちらにお住まいですか？

川村　祖母が亡くなった頃は、大森区（現・大田区）の、伊藤博文に関係のある伊藤町というところだったらしいのですが、ぼくが東京に出てきて物心ついた時には、本所区の東両国（現・墨田区両国）におりました。というのも、相撲の高砂部屋の当時のおかみさんが父の妹だったんですよ、ぼくの叔母にあたる人です。

今西　なんというお名前だったのですか？

川村　テルです。新橋演舞場は新橋芸者の演舞場ですが、叔母はその新橋演舞場に関係のある川村徳太郎という人の養女に入りまして、くわしいことはわかりませんが、力士の二代目朝潮と結婚しました。この叔父はのちに高砂浦五郎となり、双葉山が六九連勝を続けていた頃には、大日本相撲協会の取締役でした。

父が演舞場に勤めたのも、おそらく叔母の紹介があったのでしょう。それで、母が東京にひきあげてきたてからは、両国の高砂部屋と背中合わせの所に住んでいました。ぼくが物心ついてからの記憶はそこからしかありません。

今西　だいぶ粋な所で育ったんですね。

川村　まあ、あの頃は本場所は年に二回で、一月の春場所と五月の夏場所しかありませんでしたから。

今西　でも両国界隈には芸能者もかなりいた所ですね。

川村　昔はそういうこともあったのでしょうけれど、子どもの頃ですからあまり記憶はないです。高砂部屋は本場所が終わると、力士や行司さん・呼び出しさん・床山さんがみな巡業にいきますからがらがらで、従兄や従姉妹たちと広い部屋で遊んだりしていました。両国国技館は本場所と本場所のあいだにはいろいろなイベントがあり、夏には納涼祭、秋になると菊人形展などがありました。そういうところで育ちました。

今西　小学校はどちらに？

川村　近くの江東小学校です。「こうとう」と呼ぶのが正しいらしいのですが、当時は本所高等小学校（本高）というのが別にありまして、そちらも「こうとう」科とみなが呼ぶものですから、まぎらわしいので、ぼくらの小学校は「えひがし」と呼ばれていました。現在は両国小学校という名称です。

今西　尋常小学校ですね。

川村　ええ、そうです。芥川龍之介も卒業生です。芥川龍之介が住んでいたところが石井さんという釣り具屋になっていました。

今西　高等科はどちらに？

川村　高等小学校はいま江戸東京博物館があるあたりで、現在は両国中学校になっています。

今西　当時の小学校教育はいかがでしたか？軍国主義的なものはまだありませんでしたか？

川村　いえいえ、一九三五（昭和一〇）年はちょうど天皇機関説事件の年で、国体明徴が浸透していく時期でしょう、まさにその渦中に小学校に入ったわけですから。江東小学校の校歌は、いまもときとどき思いだしては苦笑いするんですけれど、「学びの道の一筋に、なすべき事は多けれど、国をいや富ましし、共に尽さん忠と孝」といった歌詞で、教育勅語丸出しです。明治末期（西園寺公望内閣）の司法大臣をつとめた、出雲大社の宮司千家尊福（せんげたかとみ）の作詞です。みればみるほど、教育勅語をそのまま校歌にしたようなものです。戦後にしばらくたって母校に行ったら、まだその校歌がそのまま使われていて、なんじゃこれはと思いました。そういう時期に入学したのです。ただ、まだ日中戦争が全面化はしていない時期ですから、のんびりしていたところはあったんですけれども、国体明徴は着実に浸透していったのではないでしょうか。ちょうど六年生のときが一九四〇（昭和一五）年ですから、近衛文麿の新体制運動や、高度国防国家だとか、大東亜新秩序だとか、そういうことが盛んにいわれるようになって、しかも紀元二六〇〇年でしょう。そういう高揚した時期に六年生だったから、世間の風潮に、影響を受けたとまではいわないけれど、感じてはいました。子ども目にも近衛首相が格好よく見えてね。

今西　軍国少年だったんですか？

川村　意識的な軍国少年だったわけではなくて、それが当たり前と思う少年だったんじゃないかね。

今西　学校の先生には、反戦的なことをいう人はいなかったですか？

川村　あの頃はいないですね。戦争をとくに謳歌するとか、あるいは反体制的なことをあえていうような教育ではなかったです。まあでも、どこでも同じですけど、式などがあれば教育勅語が奉読されたり。

今西　それはあの頃は、どこでも奉安殿に御真影と教育勅語を飾っていましたから。中学校はどちらにいかれましたか？

川村　当時の東京府立七中、いまの都立墨田川高校です。墨田川に架かる浅草の吾妻橋と言問橋の先にいま桜橋があり、さらにその先に白鬚橋がかかっていて、橋のそばに朝鮮（高麗王）と関係のある白鬚神社がありまして、中学はその近くにありました。園芸の趣味がある人には、向島の百花園の隣だ、とい

うふうに説明します。永井荷風の作品を読んでいる人には、玉の井の近くです、と。「墨東綺譚」の舞台のすぐ近くですから。

今西　玉の井のあたりですね。

川村　でも、ぼくは子どもだったし、奥手だったから。戦後、同期の同窓会をやって、そのあたりに同窓生が何人も住んでいたということがわかりました。学校の南の方に遊郭があったらしく、そこの子どもが下級生にいて、成績が優秀と聞いたことがあります。

今西　遊郭の子どもだから差別される、というようなことはありましたか？

川村　ぼくは直接接してはいませんでしたが、そういう話は聞いたことがないですね。

今西　中学時代で思い出に残っている先生や、教科などはありますか？

川村　江東小学校ではいちばん出来る子は府立三中に進むんですよ、いまの両国高校へ。裕福な家の子はいまの都立九段高校、当時の市立一中にいきました。もっと裕福な家の子は慶応普通部なんかにいくんです。ぼくは、どこにいこうかなんて特に考えていなかったんだけれども、先生が成績を勘案して振り分けてくれたんでしょう、それで府立七中を受けました。ぼくは第二〇回生でした。

七中の校歌は幸田露伴の作詞なんですよ。露伴は向島のあたりに住んでいました。学校は、原敬内閣の教育政策で、大正期の後半に中学・高校・大学が増設された時にできたもので、一九二二（大正一一）年の開校です。その時に、中学の先生が露伴のところに作詞を頼みに行ったのです。「墨田の川は吾師なり」という歌い出しではじまり、「日夜をせかず、おこたらず、流れてやまぬ何十里、汪々として海に入る」とつづく、すばらしい内容のものでした。露伴は校歌の作詞は二つしかしていないようですが、その一つです。

先生も、そういう雰囲気のある人たちで、ぼくが入った一年A組の担任は西山俊行という先生でしたが、その息子の西山徳さんはぼくの大学の先輩で、戦後は伊勢市の皇学館大学の先生でした。

今西　中世史の西山克君のお祖父さんですかね。

川村　その西山俊行先生というのは授業がたいへん上手でして、「豊臣秀吉が、なァ徳川君なんて声をかけてなァ」という調子で、ぼくが歴史好きになった一つの理由になっています。二年B組と三年A組のときの担任が久保寺逸彦さん。

今西　代表的なアイヌ研究者ですね。

川村　金田一京助さんのお弟子さんです。あの頃、久保寺さんは、『広辞苑』の前身の『辞苑』の編集に参加されていまして、ぼくもさっそく買いましたよ。アイヌの歌を聞かせてくれたりして、関心とまではいかないけれど、興味を持ちました。四年E組のときの担任が田中睦夫さんという英語の先生で、サマセット・モームの研究者です。この人には二年生のときから英語を習ったのですが、とにかく型破りな人で、怖いんですよ。ぼくらは「原始人」というあだ名をつけていました。でも、その授業たるや、なかなかおもしろいものでしたよ。怖かったけど、好きでしたね。「しらみつぶしの戦法」と言って、丹念に辞書を引くことの楽しみを教えてくれました。

それ以外には、中嶋馨という先生がいました。この人は、中島河太郎というペンネームで江戸川乱歩など推理小説の研究者です。東大を卒業してすぐ七中に赴任してきてまだ若かったので、ぼくらは「あんちゃん、あんちゃん」と呼んでいました。晩年になってもやっぱり「あんちゃん」と呼んでいましたけど。この人は怒ると、生徒を並べて後ろからお尻を蹴り上げるんですよ。「ホイホイ」といいながら。

今西　その頃は、体罰はふつうだったんですね。

川村　ええ。戦後、同窓会にみえられて、その頃は和洋女子大の先生になっていたんですけど、「先生、いまでも女学生のお尻を蹴るんですか」って冗談に聞いたら、「そんなことしたら、クビだよ」なんて言っていました

ね。

それ以外にも、自由主義的とまで言えるかどうかはわからないけれども、軍国主義の風潮に逆らわないまでも、同調しない教師はたくさんいました。三年生のときが一九四三（昭和一八）年で、その頃は社会のなかも学校のなかも、戦争気分がいちばん高まっていたときでした。連合艦隊司令長官の山本五十六が戦死した時には、日比谷公園の国葬に学校で行った記憶があります。全校生徒に追悼文を書かせて、そのなかからいくつかが選ばれて、和紙を与えられて、ぼくも墨筆で清書しました。それをいま読みたくてね。新潟県の長岡にある山本五十六記念会に問い合わせてみたんだけど、記念会にはなく、息子さんのところではないか、といわれました。それ以上調べようとは思いませんでしたが、みつかったらおもしろいなと思ってはいます。

今西　あれば、現代史の貴重な資料になりますね。

川村　おそらく、全国の中学生にそのような追悼文を書かせたのではないでしょうか。

また、時局講演会というのがときどきあって、いまでも覚えているものの一つは、東大の中村孝也先生の講演です。話の内容はほとんど覚えていないけれども、最後に先生は「ぼくは、七度生まれ変わっても七中に入学する」なんて、楠木正成を引いてお世辞を言いました。その頃、七中の校友会雑誌のタイトルが『七生』という名前でした。あとで知ったのだけれども、戦時中の東大国史学科のなかで、中村孝也先生はアンチ平泉澄派の一つの寄りどころだったようですね。

今西　実証派で、江戸時代の経済思想をやっておられましたね。

川村　小西四郎さんにしても、遠山茂樹さんにしても、原田伴彦さんにしても、みんな中村先生のところに集まるようになっていたようですね。

もう一つ覚えているのは、満洲帰りの将校が満洲事情の話をして、そのときつい本音が出たのかな、「ほんとうは満洲国なんかつくらないで、日本が直接支配すればいいんだ」、なんてことを言ってね。

今西　それは当時の軍人の本音ですね。

川村　そのつぎの時間の授業で、海軍の予備役少佐だった数学の先生が、「なんたることを言うか」と授業そっちのけで憤慨していたことを覚えています。一九四三（昭和一八）年というのはやはりたいへんな年で、海軍の少年航空兵である甲種予科練（甲種飛行予科練習生）の大々的募集がありました。乙種も含めて予科練の戦死者というのは多いんですよね。

今西　あの頃は、予科練にいく人が多かったですからね。

川村　ぼくらの学年から国防色（カーキ色）の制服に戦闘帽になって、一学年上まではずっと学生服・学生帽のままだったのが、とても不満だったのですが、その学生服を着た五年生が、学生帽を握りしめてぼくら三年の教室に来て、「若い血潮の予科練の七つ釦は桜に錨」っていう予科練の歌をうたいながら、「諸君、いっしょに行こう」なんて叫んでいました。

今西　いちばん戦意が高揚していた時期ですからね。

川村　そのなかにいたかどうかはわからないけれども、アナウンサーの小川宏がそのときの五年生でした。朝礼の時間には校長も、予科練というところはいかに特典があって、いかにお国のために役立つかという訓示をたれていました。「諸君、お国のために予科練に行きたまえ」、と。

今西　先輩が後輩に軍国主義的な考えを伝えるという傾向は、旧制中学では強かったようですね。

川村　ぼくは思想的には奥手でしたが、学校全体がそういう雰囲気になっていました。当時七中には一七中と夜間中学が併設されていて、そのうち七中と一七中が一緒に朝礼に出ていました。その数が合計で二千数百人。全員が戦死したアッツ島の戦死者の数が約二千余人といわれていましたから、こんなに多く

の人が戦死したのかと思ったりしました。

今西　サイパンは三千人ですからね。ところで、高等学校はどちらに行かれたんですか？

川村　浦和高校（旧制）です。その前に、中学四年生の一学期の半分ほどで学徒勤労動員に出されましてね。

今西　勤労動員はどちらに？

川村　本所区の柳島です。京成電車の始発駅のある押上の東が、柳島という当時の都電の終点でした。その一帯は工場地帯なんです。かつて東大学生のセツルメント活動がおこなわれた地域です。そのなかの、おそらくもとは紡績工場だったところが、大日本兵器株式会社の軍需工場になっていました。

そこに動員されたのが一九四四（昭和一九）年の六月二〇日ごろ。その直前の六月一五日、サイパン島の戦いがはじまった日ですが、配属将校に引率されて、土浦にあった予科練を有志で見学に行き、一泊してきました。翌日の明け方、警戒警報で起こされました。トイレに行ったら、予科練生たちと一緒になったのですが、彼らはえらく殺気立っていました。どうしたのかと聞いたら、サイパンが攻撃されている、と。それで見学は急きょ中止になって、土浦の駅まで走らされました。そして帰ってきてすぐ、勤労動員に出されたのです。大日本兵器の工場では、海軍の飛行機の機関銃でつかう弾丸や信管・薬きょうなんかをつくっていました。

また三年生の時の予科練の募集ですが、みんなが応募するので、ぼくも予科練を受けようと思ったのだけれども、ぼくはひとりっ子だったんです。母親に予科練は軍隊かと聞かれて、そうだと答えたら、ひどく悲しそうな顔をしてね。やっとの事で思いとどまりました。でも、どこか受けないと格好がつかないので、四年生になって海軍と陸軍の経理学校を受けたけれども、ぜんぶだめだったんです。高等商船学校だけは合格したけれど。

今西　海軍兵学校や陸軍士官学校に行く人もいたのでしょう。

川村　それは成績が優秀な人でね。いま同窓会に出ると、海兵や陸士出身の友人がけっこういます。突っ込んだ話を聞こうとすると、彼らはためらいますね。いろいろな思いがあるのでしょう。でも、海兵・陸士に行こうが行くまいが、ぼくも含めてあの頃のみんなの気持ちは軍国少年として一緒だったわけだから、もっと話してほしい、とぼくは思うのですが。

どこに行こうかと考えていたとき、四年のときの担任の田中睦夫先生が、ぼくらのところに来ました。ぼくには親友がふたりいて、ひとりは高橋史朗といって、もう亡くなりましたが、経済企画庁に勤めたこともある友人です。もうひとりが原田謙一という近所に住んでいた親友です。この三人組に田中先生が、「高橋、おまえは一高を受けろ。原田は東京高校だ。川村は浦和に行け」、と勧めてくれたんです。それを聞いて、ぼくはほっとしたことを覚えています。僕の従兄が浦高の卒業生だったのです。高橋は一高に落ちて、横浜高等商業に、原田もだめで、千葉工大を受験して合格しました。

ところが原田は、三月一〇日の東京下町大空襲のとき、自分が卒業した小学校のなかに逃げ込んで、そこで亡くなったんです。

今西　それは気の毒に。

川村　そのショックが、ぼくが戦争に疑問をもつきっかけのひとつになりました。なんで死ななきゃならないのか、という。一九四五（昭和二〇）年三月一〇日の東京下町大空襲ではぼくも家が丸焼けにされました。交通事故に遭って下半身をギブス（石膏）で固めたままの父を、母と二人で連れ出しました。ただ、ぼくは隅田川の近くにいたので、川端で火がとまって助かりました。でも、原田は下町のど真ん中でしたから、逃げ場がなくなってしまったんです。

テレビで放映されたこともありますが、原田が逃げ込んだ二葉国民学校は、教室のガラスが吹き飛ぶほどの火炎につつまれました。校舎のなかで亡くなったのか、プールで煙にまかれたのかわかりませんが、とにかく

ショックでした。

2　浦和高校の生活

川村　一九四五（昭和二〇）年という年は、どういうわけか浦高の入学式が七月一日でね。

今西　戦争末期でゴタゴタしていたからでしょうかね。

川村　浦和高校に合格はしたのですが、追って連絡があるまで、卒業した中学校で勤労動員に従事するように、という通知が学校から来ました。

家は三月一〇日に焼けてしまっていましたから、焼け残った家に頼みこんで転々と入れてもらっていました。両国駅の南側の一角が焼け残っていまして、そのなかに鳳部屋という相撲部屋があったんですが、家族や力士が全員疎開して留守になっていたので、転がり込んだ罹災者がそのまま居座っていました。

四月の末に七中から、五月一日上野駅集合という通知がきました。戦後に米軍の通信基地があった横浜の瀬谷に大日本兵器がバラック建ての工場を急造しまして、五月と六月は瀬谷工場の寮にいました。あの頃の瀬谷は本当の農村でした。

瀬谷は海軍基地の厚木が近いんですよ。ですから、米軍の艦載機が攻撃しているのがみえました。バリバリバリ、と機関掃射をしながらものすごい音で飛んで来る。あれは、狙われたら足がすくんで逃げられないですよ。

今西　腰が抜けてしまいますね。

川村　寮の上を超低空で米軍機が飛んでいてね。錯覚でしょうけど、アメリカの兵士が後ろをむいてニヤッと笑ったような気がしましたよ。これは怖かった……

今西　空襲の最後の時期ですからね、すごい勢いできていたでしょう。もうサイパンも全部おちているから、毎日飛んでくるわけですね。

川村　あの頃は、電車に乗るにも切符が販売を制限されていましたから、工場でガリ版刷りの出張証明書をつくってもらって、それを何枚ももって切符を買っていました。

今西　じゃあ、勉強どころではありませんね。

川村　勉強はしませんよ。柳島の大日本兵器にいた頃も勉強はしませんでした。それで、七月になって卒業校の浦和に行ったんですが、入ってみると同学年の新入生がすでにいたんですよ。空襲にあって勤労動員に出られず、行くところがなかった生徒を浦和の寮で引き取って、農作業などをさせていたようです。

戦後の一〇月に自治寮が復活した時に、ぼくは体操部に入りました。戦争中からのクラブですから、器械体操ではなく、ラジオ体操のような健康体操でしたが。その体操部の先輩の日記を読ませてもらいましたら、一九四五（昭和二〇）年一月に入学試験があったが、今年の新入生はかわいそうだ、合格してもすぐに入学させてもらえないのだから、と書いてありました。ですから、入学が遅れる事情は、一九四五年のはじめごろにはわかっていたんですね。高校は二年間で卒業という状況になっていましたから、上級生は一学年上しかいません。入学前にその上級生から呼び出されて、寮歌演習なんかをやらされました。

七月一日に入学して翌日の二日には浦和高校としての勤労動員で、いま新しい鉄道博物館が評判になっていますが、大宮駅近くの大宮工機部という鉄道の工場（現在はＪＲ東日本の大宮工場）で八月まで働きました。米軍機の機銃掃射で穴の開いた蒸気機関車を何台も見ました。

浦和高校では理科でした。文科は人数が少なかったですから。

今西　徴兵猶予の問題もありましたからね。

川村　それもあったね。入学式と入寮式をすませて、武原（ぶげん）寮の部屋を割り振るのですが、あの頃はまだクラブが復活していないので、クラスごとの小隊単位で分けられました。ぼくは理科の二組でした。その夜に、ストーム

があってね。

今西　旧制高校の寮ではよくやられていたようですね。

川村　一九四四（昭和一九）年度までは自治寮が保たれていたんですが、ぼくらが入った一九四五（昭和二〇）年度からは統制寮になって、学校が任命した小隊長以下、各クラスが小隊単位で寮に入りました。ストームも学校からは禁止されたらしいのね。弘前高校の校長をつとめてから浦和にきた安齋宏索（こうさく）という人が校長、修練部長が、戦後、『世界史の研究』（旺文社、一九六七年）で有名になった吉岡力さんでした。ストームの晩は、吉岡さんが寮の中を見回っていてね。

今西　やらせない、と。

川村　その目を盗んでね。上級生が、「おーい、吉岡いるかあ」、「いまいないぞー」、なんて連絡をとりあっていたんだけども、あるとき、「吉岡いるかあ」ってやったら、吉岡さんがその棟にいてね、「吉岡はここにいるぞ」って答えたものだから、上級生がガタガタと朴歯の下駄を鳴らして逃げ出して。

今西　いま考えたら、かわいいですね。

川村　その時に、悪戯（いたずら）な上級生がいてね。文科は、文甲と文乙で三〇人ずつしかいなくて、理科は一クラス五〇人単位で、六組ありました。その文科の一年生を、おそらく小隊長だと思うんだけど、新入生を引っ張りだしてきて、理科の新入生にストームさせたんです。われわれ理科の部屋に入って来て、「なんで理科に入ったあ、命が惜しいからだろう」、って罵（ののし）るんです。答えようがないけれど、あとで新入生だって知って、頭にきたね。

今西　当時の文科は理科に対してそういう意識があったのでしょうね。ところで子どもの頃は、どういう本を読んでおられましたか？

川村　中学の同級生はずいぶん文学書なんか読んでいたようだけれど、ぼくは本屋をまわって文学書を買うなんていうことはあまりなかった。円本時代の名残りか、『小学生全集』（文藝春秋社）や『日本児童文庫』（アルス）の一部が何冊か家にありました。それに父の蔵書ですが、曾我廼家五郎の作品集と、講談社の『教養全集』なんていうのも家にありました。父が新橋演舞場に勤めていたり、教養趣味があったからかもしれません。それをぱらぱらめくっていたほかは、小学校の友だちから『少年講談』を借りて読んでいました。歴史好きになる第一歩です。『少年倶楽部』だけは毎月買っていましたけれど、子どもなりに家の生活も考えていたのか、二〜三日で読んで古本屋に売りに行って、けっこういい値段で買ってもらっていました。中学生になってからは、特別読書にはげんだといわけではないけれども、貸本屋にはよく行きました。

今西　貸本屋は、当時は盛んでしたよね。

川村　表題につられて、中身もわからないままに神風連の乱のものなんか読みました。よく覚えているのは、満田巌の『昭和風雲録』（新紀元社）。二・二六事件のことが書いてある。七中にいた青島先生という人の息子さんが、二・二六事件に関係しているという噂が生徒のあいだでひろまっていました。それで、この本は一生懸命に読みました。

高校の話に戻りますが、一九四五（昭和二〇）年の八月一〇日過ぎのことだったと思います。同級生の松井君のお父さんは毎日新聞の浦和支局長をしていました。その松井君が実家で、日本が連合国と交渉をはじめたという話を聞いてきたんです。同窓会で彼に会った時にその話をしたら、「これからは新聞を気をつけて読め」と父に言われた、と言っていました。でも、ぼくは交渉をはじめたと聞いた記憶がある。この話は、戦局を考えれば明らかに終戦の交渉だなと思った。そして八月一四日は、どういうわけか、大宮工機部の仕事がお昼で終わったんです。そして、一四日の午後、一五、一六、一七日の三日間は休みだといわれました。一四日の正午ではまだ降伏の最終決定はしていませんよね。

今西　最後にもめているときですよね。

川村　それなのになんでそんなことになった

のか、よくわからない。でも、ぼくたちはこれで日本が降伏するのだと受け止めました、松井君の話から考えて。それで、休み中はどうしようか、と。実は同級生に澁澤龍彦君（本名は龍雄）がいるんですよ。彼は松井君と仲がよかったので、松井君は澁澤君の思い出なんか書いています。澁澤君は、渋沢栄一の遠縁で、実家が埼玉にあったから、彼は家に帰った。

戦争に負けたのだから、とみんな散り散りになりました。ぼくは中学から一緒に入った内藤裕義君という友人がいて、戦後は中教出版で教科書の編集を担当しましたが、彼の両親が名古屋の近くの安城にいるから、そこに帰ると言う。ぼくは岐阜に親戚がいたので、内藤君と一四日の午後三時に東京駅で待ち合わせをして、各駅停車に乗りました。一四日はまだ空襲がありましたから、警戒警報で列車はしょっちゅう止まりましたが、一五日の夜中二時か三時ごろに岐阜駅につきました。岐阜は七月に空襲で焼けていましたから、駅舎は仮のバラック建てでした。そこの石畳に横になって、明るくなるのを待って、母方の叔母のところにいきました。叔父は、関特演で召集され、満洲の牡丹江に行っていませんでした。それで、「おばさん、戦争はもうおしまいだ」と言って入って行ったら、「なにをいうのっ」と叱られました。ですから、一五日正午の天皇の放送は、叔母が厄介になっている叔父の親友の家で聞きました。放送が終わってから、昼飯を食べて、小学校一年生の従妹を連れて長良川に泳ぎにいきました。八月一五日に長良川で泳いだのはぼくたちだけです。

今西　食糧事情は岐阜の方がよかったのですか？

川村　そんなことないと思いますよ、どこも同じでしょう。何を食べさせられたか覚えていないけれども。岐阜で一晩泊って、関ヶ原の手前の垂井で呉服屋を継いでいた父方の叔父のところに行ってもう一晩泊りました。一七日にまた各駅停車に乗って東京駅に帰ってきました。両国の両親のところに土産をおいて、浦和の寮に戻りました。

寮でみんなと一緒に話していたら、グラウンドに集まれ、と誰かが言うのです。小菅昭三さんという本当は一年上級で、自治寮を取り上げられた時に反対運動をして落第させられた同級生ですが、彼が「戦争は終わった。これからはわれわれの時代が始まる。感激を込めて踊ろう」と呼びかけて、みんなでデカンショを踊りました。あれは楽しかった。

踊り疲れて寮に戻ると、宿直の岩永という英語の先生に呼び出されて、寮の玄関にみんな並ばされて、「日本国中が悲しみにうちひしがれている時に、デカンショを踊るとは何事であるか」とお説教を食らいました。でも、そこからぼくたちの戦後がはじまったんです。

今西　小菅さんのような、自治寮をつぶされた時に反対運動をして落第させられたような人がいたんですね。

川村　小菅、大友、山本、小倉のみなさん、何人もいますよ。

今西　そういう反対運動があったのですね。社研のような組織はあったのですか？

川村　戦争の末期には、そういう組織はなかったと思います。ただ当時、浦和高校には柳田謙十郎さんがいまして。

今西　京都学派の哲学者ですね。

川村　西田哲学の祖述者です。大宮工機部で昼間仕事をしていた頃、夜に二コマ二時間だけ授業がありました。校舎は焼けていましたが、階段教室の理科教室が三棟残っていて、柳田さんの授業などがありました。

柳田先生の開口一番のことばは、いまでも忘れません。「哲学とは歴史的自己自覚の学である」。これは、柳田さんが戦後に出した『西田哲学体系』の書き出しのことばです。

今西　柳田さんは、戦争で息子さんを亡くしてから、変わっていったようですね。

川村　上級生に聞くと、勤労動員先に来て、生徒たちに勉強しろとよく言っていたそうです。

今西　西田哲学と自分の体験とのあいだでだいぶ悩んだようですね。

川村　一九四七（昭和二二）年ごろになると、マルクスの影響がだいぶ入ってきて、西田哲学とマルクスのあいだで揺れていたようです。ぼくがこの年に三年生で文科に移り、柳田さんの講義を聴きましたが、その題目が「観念論と唯物論」でした。東大で哲学の討論会があって、柳田さんは松村一人と討論をされたそうです。

今西　松村さんは、法政大学に行った人ですね。ヘーゲルとマルクスの研究をやっていました。

川村　柳田さんは授業で、松村一人との討論で、あなたは観念論だとさかんに批判されたことを話していました。柳田さんのまわりにいた編集者からあとで話を聞くと、やはりかなり考え込んでいたそうです。

今西　柳田さんは浦和高校で教えていたんですか。

川村　ぼくが在籍していた当時はおりました。また八月一五日の話ですが、三日間の休暇が終わってみんな寮に帰ってきて、これからの日本はどうなるかと話し合っていたとき、井手恵生君という人がいました。のちにコニカの社長になりましたけれども、彼は一年浪人していて、ぼくは中学四年で入っていましたから、二歳年長なんです。二歳も違うと頭の中がこんなに違うものかと思いました。同級生ですからふだんは呼び捨てにしていましたけれども、話をすると全然かないませんでした。井手君は、これからの日本にはジャズとデモクラシーが入ってくる、と話ました。ぼくはジャズもデモクラシーも知らないから、それは何？　と聞いたら、「馬鹿たれ」と叱られたことが忘れられません。その記憶はぼくだけのものではありませんでした。澁澤龍彦君が亡くなったあと、アサヒグラフが澁澤君の書斎を写していて、彼の若い頃のノートも出ていました。ちょうど戦争直後のページが開いてあって、ジャズとデモクラシー、とメモされていました。井手君の話は、その場にいた者にとってはかなり印象に残ったようです。

今西　まだアメリカ文化のことはみんな知らなかったですからね。高校時代はまだ社研のようなことはやっていなかったのですか？

川村　二年生の時に武原寮の役員をやりました。一年上級に井上芳夫という詩人がいました。のちに大映の映画監督になり、大映をやめたあとはテレビドラマの脚本を書いたり演出をしたりしていました。彼とととても親しくなりました。彼は、戦争中は体操部だったんですが、戦後に文芸部をつくりました。文芸部には出口裕弘（ゆうこう）君もいました。

今西　一橋大学教授になった、フランス文学者ですね。

川村　澁澤君ともずいぶん親しかったようです。澁澤の追悼は出口君と松井君がよくやっています。ぼくは世間知らずで、中学生みたいな高校生だったから、井上芳夫さんはぼくを鍛えるつもりもあったのでしょう、寮の役員に立候補しろ、と勧めてきました。一年生は全寮制ですが、二年生からは自宅通学や下宿が認められていました。クラブの委員でもなければ二年生はほとんど寮に残れませんでした。ぼくは家が焼け出されて、両親はせまい部屋に住んでいたこともあって、それを井上さんに話したら、寮の役員になれ、と。それで、一九四六（昭和二一）年三月、立候補演説なるものをはじめてやりました。井上さんの指導を受けながら。うまく当選しまして、前期の半年間、会計部委員をやりました。半年終わったら、井上さんは三年生なのに後期の役員選挙で総務に立候補すると言い出して、おまえも立候補しろといわれました。彼は卒業のぎりぎりまで総務をやって、ぼくは会計部長をやりました。それでぼくはずっと寮にいることができました。

　ぼくが入っていた体操部は多士済々で、一学年上には平山宗宏という、のちに東大教授の小児科の大家がいたり、早野寿郎という、のちに俳優座の養成所を出て小沢昭一と大の仲良しだった俳優・演出家もいました。一九

四六（昭和二一）年の秋、二年生の時に武原寮の記念祭で、体操部がロマン・ロランの「群狼」を早野演出で上演しました。これが早野さんの演出の初作品でしょう。一九四七（昭和二二）年、三年生のときの五月の記念祭ではフレンツ・モルナールの「リリオム」をやりました。このふたつの上演は学内でとても評判がよかったんです。体操部のぼくらの世代は芝居好きになり演劇関係者が何人も生まれました。一年生の吉沢京夫君など、のちに劇団新演をへて自ら演劇塾や劇団京を主宰しました。

今西　川村さんも出られたんですか？

川村　出ました。

今西　役者として。

川村　ええ、両方とも出ました。ぼくが三年生になった時に、吉沢京夫という一年生が芝中学から入ってきました。部屋でみんなで議論なんかしていると、彼は西田哲学をふりまわすのですよ。ぼくは、柳田さんの講義は聴いていたけれども、自分で西田哲学を読んではいませんでした。『善の研究』は前の年に岩波書店に朝早く行って買いましたけれども。

今西　並んで買ったんですか。

川村　はい、でもぱらぱらとしか読んでいなくて。それで、吉沢君が西田哲学をふりまわすものだから、これはいかんと思って、はじめてゆっくり読みました。それで吉沢京夫に立ち向かおうとしたら、彼はすでにマルクスを読んでいるわけ。

今西　むこうのほうが一歩早いわけですね。

川村　これはいかんと思って、それでぼくもマルクスを読みはじめたんです。下級生に負けまいと思って。一九四七（昭和二二）年という年は、あちこちで学生自治会の運動やカスリーン台風の支援活動といった学生の社会運動・奉仕活動がさかんになった年でした。浦和も同様でした。

今西　全学連は？

川村　全学連の結成は翌年の大学高専のストライキの後ではないでしょうか。浦和高校でも、民青（日本民主青年同盟）の前身の青共（日本青年共産同盟）の影響や、自治会をつくろうという動きがあり、先に出た小菅さんがいちはやく共産党の運動を持ちこんでいたようです。ですが、ぼくは受験勉強で頭がいっぱいでした。ぼくは三年生の時に文科に変わりました。澁澤君は戦後すぐに文科に変わりましたが。

今西　澁澤さんも理科だったんですか。

川村　ええ、理科の同級生です。戦後は文科が少なくて。

今西　変わりやすかったようですね。

川村　澁澤君は戦後さっさと変わって、ぼくらは「ポツダム文科」なんて呼んでいました。ぼくは、二年生の時に寮の役員をやっていたせいで、学校にもぜんぜん行かなかったから、成績はガタ落ちでした。一年生の後期はそれなりの成績でしたが、二年生の前期は後ろから四～五番目ぐらいになっていました。父親が戦争中に交通事故にあって戦後は仕事をしておらず、大学へ行ったらアルバイトをしなければならないだろうけど、理科ではそれも難しいだろう、ということも考えました。それに歴史への興味もあって、文科へ変わろうと思いました。三年生になってから、先生のところに転科を申し込みに行ったら、「一〇年後に悔いることはありませんか」と聞かれましたが、そんなことはわからないですし、「ありません」と答えて、文科に変わりました。

　澁澤君は文甲に行ったのですが、ぼくの時には文乙しか認められませんでした。ぼくはドイツ語が苦手でね。大学の受験勉強のためにはドイツ語の勉強をしなければならなかったから、マルクスの『経済学批判』をドイツ語で読んだりしましたが、とても歯がたちませんでした。それで結局は英語で受験することにしました。

　学生運動へのマルクスや共産党の影響は、一九四七（昭和二二）年の夏ごろから学生に浸透していって、ぼくも関心はもちはじめていましたが、直接は関わりませんでした。運

動は不得手でしたから、世間づきあいも苦手で。文乙に入って、吉岡力さんの授業がありました。

今西　吉岡さんは歴史を教えていたんですね。

川村　吉岡さんからフランス革命を習いました。吉岡さんはもともと古代史の専門家ですが。吉岡さんと親しい三笠宮さんと話した時に、浦和の思い出をお話しすると、「吉岡さんがフランス革命を教えていたんですか」と驚いていました。

今西　高校の授業ですから、仕方がないですね。

川村　それでレポートを書いたら、吉岡さんが、「今度の試験で残念だったのは、唯物史観で書いた答案が一つもなかったことである」と講評されたので、ストームのことを思い出して、何を言ってるんだ、と不思議に思いました。

　野村さんという日本史の先生がいて、ぼくは直接授業を聴いたことはありませんが、皇国史観丸出しの講義だったようです。浦和では「男爵」と呼ばれていました。東大で遠山茂樹さんと同じ世代だったらしく、遠山さんに聞いたら、ほんとうに男爵だったようです。野村さんの一九四七（昭和二二）年の授業は、何年に何がありまして、だれだれがおりまして、つぎに何年になると、こういうことがありまして、という調子で。

今西　年表を読んでいるようですね。

川村　そうしたら、吉沢京夫君が、そんな年表を読むような授業は歴史の講義とは違う、と言って問い詰めたんです。戦後、浦和高校の校長には新関良三先生（ドイツ文学者）がきていました。野村さんが、その新関さんのところに相談に行ったら、「事実だけを教えればいいじゃないですか」と助言されたそうです。

　吉沢京夫君はこうして浦和の学生自治会運動の中に入って行ったようです。彼のお兄さんは中世史を研究していた、東大歴研の吉沢和夫さんです。民話研究者として松谷みよ子（児童文学者）の仲間のひとりです。吉沢京夫君を通して、吉沢和夫さんから、当時一九四七（昭和二二）年頃の東大歴研の話が入ってくるんです。ちょうどこの年、東大歴研が「日本歴史講座」を開いたので、ぼくは吉沢京夫君と授業をさぼって講義を聴きにいきました。のちにこれは学生書房から本になりました。石母田正さんが古代史をやっていて、講義の冒頭、藤間生大さんの『日本古代国家』について、藤間さんの研究が家族の分析からはじめているのは、あたかもマルクスが商品の分析からはじめているごとく、と評価していました。古代史の内容はよくわかりませんでしたが、家族と商品の話のことはよく記憶に残っています。

　のちに日本近代史研究会の歴史画報でご指導をいただいた、和島誠一さんの考古学の講義もありました。浦和高校の先輩で考古学者の江上波夫さんが、登呂遺跡の調査からの帰りに会場にきていて、知人と発掘の話をされていました。服部之總さんの話もはじめて聴きました。

3　東京大学文学部へ

今西　服部さんが「近代日本の成り立ち」について講演を東大でしていますけれども、これはもう少しあとですか？

川村　あれは、学生自治会が主催した別の講演会です。東大歴研のときは、明治維新と自由民権運動の話をされていました。これが服部さんに出会った最初です。吉沢京夫君から、お兄さんの受け売りだと思うけれども、服部之總の絶対主義論などの話を聞いて、それで服部さんの論文を読むようになりました。それは影響が大きかったです。

　遠山茂樹さんは浦和高校の先輩ですから、東大に入ってから史料編纂所に訪ねていって教えを受けました。国史学科のぼくの同級生に坂本建紀君がいて、彼の高校時代の親友が、あの集会条例を起草した帝国大学初代総長の渡邊洪基の孫で、その家に渡邊洪基の資

料が残っているというんです。その話を遠山さんにしたら、史料編纂所でその資料を受け入れることになり、整理してカードをつくろうということになりました。坂本君とふたりでその友人の家に資料をもらいに行って、史料編纂所に運びました。坂本君と、ぼくの親友だった原田勝正（政治史・交通史）、教育史の太田さんという人、それから遠山さんの五人で史料編纂所でカードづくりをしました。あの文書はまだ史料編纂所にそのまま残っていると思います。

今西　その頃はもう東大に入学しておられたわけですね。

川村　もう入っていました。三年生のときのことです。浦和の時に日本歴史講座を聴いて、やっぱりぼくは日本近代史を勉強しようと思いました。遠山さんの顔をはじめてみたのも、その講座の時でした。

今西　日本史をやろうというのもその時に思われたわけですか？

川村　そうですね。それにやはり、戦争時代のことがそれなりに反省していましたから、明治維新以降の歴史を勉強しなければという気持になっていたこともあります。

　東大に入ってみたら、ちょうど、授業料値上げ反対闘争がはじまる頃で、勉強どころではありませんでした。入学するとすぐ、吉沢京夫君から聞いていた東大歴研の先輩たち、国史の小沢圭介、帯金豊、藤原彰、西洋史の荒井信一といった人たちに出会い、授業料値上げ反対闘争、教育復興闘争への戦後最初のストライキにむけて、ビラ配りやガリ版切りを手伝うことになりました。ストライキは六月です。色川大吉さんは入れ替わりでもう卒業していました。色川さんと吉沢和夫さんとは親友でした。

今西　網野善彦さんは？

川村　網野さんは一年上の先輩です。

今西　網野さんは、学生運動でもだいぶ偉い人だったんですよね？

川村　東大の国史研究室には、青村眞明を中心とする青村時代というのがありましたが、ぼくが入学した一九四八（昭和二三）年には卒業してからも、胸を悪くして手術をされ、姿を見せなくなりました。

今西　私が生まれた年です。

川村　一九四九（昭和二四）年過ぎに青村さんは戻ってきたんだけれど、その後は網野時代になっていました。授業料値上げ反対闘争の頃からは網野時代のようです。網野さんがすごいと思ったのは、ぼくが一〇時ぐらいに大学に行くと、それまで網野さんは図書館で勉強してきているのです。ぼくは、ふらふらと出かけていって、ビラを配ったりガリ版を切ったりしていただけでした。あの頃網野さんは歴史学研究会の事務局をあずかっていて、ぼくも手伝ってくれといわれ、岩波書店の二階にあった事務局で、会員からの手紙を整理したりしました。すると二〇〇円もらえて、帰りに古本屋で『マルクス・エンゲルス全集』の一冊なんかを買っていました。あの頃は、『マル・エン全集』の古いものがずいぶん出ていました。

今西　当時の歴研は共産党の人たちが中心だったわけですか？

川村　歴研のことは直接には知りません。東大国史研究室のもう一つの人脈は井上光貞さんに近い人たちです。

今西　実証史学ですね。

川村　実証史学というより、思想史ですね。井上光貞さんのと色川大吉さん、青村眞明さん、吉沢和夫さんたちが親しかったようです。

今西　色川さんと井上さんというのは、それほど近いのですか。

川村　近いと思います。色川さんが華やかに活躍するようになってからも親しい関係が続いていたようでした。千葉県佐倉の歴博（国立歴史民俗博物館）は準備段階で色川さんのアイディアがかなり入っています。

今西　井上さんが初代館長ですね。

川村　歴博の一般公開開始直前（一九八三年）に亡くなられましたが、井上さんは色川さんを非常に高くかっていました。この井

上、色川、青村、吉沢の人脈に対して、もう一つ、東大歴研には山口啓二さんの影響も大きかったように思います。

今西　山口啓二さんは史料編纂所におられましたね。

川村　山口さんと色川さんや青村さんも親しかったようです。

今西　青村眞明さんと色川さんは近かったのですよね？

川村　青村・色川というのは親友で、二人ともマルクス主義に近かった人です。

今西　色川さんはマルクス主義者でしたよね、自伝でも書かれています。

川村　色川さんが卒業する時に、井上さんが助手として研究室に残らないかと誘ったんだけれども、その頃の色川さんはヴ・ナロードだから、同窓の野本貢さんと一緒に、野本さんの故郷である栃木県の農村の中学校教員になった。藤原彰さんの話では、その土地の人たちが共産党に投票するようになったということだけれども、結局はその学校にいられなくなった。

今西　色川さんはロマンチックに農村に入って行ったけれども、現実はそんなに甘いものではないということを、野本さんは色川さんに話したんですよね。当時の色川さんは、本気で農村に革命を起こそうと思って入って行ったようですが。

川村　野本さんが死んでしまって、色川さんは栃木にいられなくなって、結局東京に戻ってきたわけです。一九四九（昭和二四）年頃には世田谷区の民商（民主商工会）の書記になっていたと思います。

　井上さん、山口さんのどちらの学風とも違うと思われていたのが、古代史の関さんで、ぼくが学生の頃は研究室でちょくちょくお目にかかりました。

今西　関晃さん。

川村　関さんに近かった一人が、ぼくの同級生の青木和夫君。尾藤（正英）さんは、東大歴研の中では藤原・網野さんたちとも、色川さんたちとも違っていましたし、関さんと近かったとも思えない。青木和夫君は、関さんに親近感を持ったと自分でも言っていました。

今西　青木さんは、マルクス主義的な方法論を使う人ではありませんね。

川村　勉強はしていたかもしれないけれども、口には出さなかったね。むしろ、マックス・ウェーバーを読んでいたようです。卒業する時に、ぼくは勉強する場所が欲しかったのだけれども、青木和夫君が研究室の助手になりました。

　やはり東大歴研は多士済々ですよね。ぼくが一九七〇（昭和四五）年から、部落の実態調査で広島に行くようになる前には、広島県の同和教育運動には東大歴研出身の先輩もとりくんでいました。お目にかかる機会はなかったですが。

今西　部落問題は大学時代からやられていたのですか？

川村　いや、大学に入って浦和から東京に戻ってきて、両親と三畳の部屋に住んでいました。相撲部屋ですからいくつも部屋がありましたが、三月一〇日に焼け出された家族が大勢転がりこんで居座りつづけていたわけです。この相撲部屋が戦後に三輪（みつわ）工業という貴金属会社に売却されて、その会社の寮になりました。焼け出された家族が出ていくと、社員の家族が入ってきました。そのなかにいたのが植木徹之助の一家です。

今西　植木等さんのお父さんですね。

川村　等も一時いました。ですから、ぼくが妻と出会えたのは、この三輪寮ですから、戦争のおかげ（？）なんですよ。

今西　そこで出会われたのですか。三重県で調査された時にでも出会われたのかと思っていました。

川村　違う、違う、ぼくはそれまで三重とはぜんぜん関係ないですから。しばらくは三輪寮に居座りつづけていたのですが、大学三年が終わって卒業する頃にとうとう三輪の会社から出て行ってくれといわれまして、三輪が用意した千葉県の市川のあばら家みたいなと

ころに移されました。

ですから、大学に入った一九四八（昭和二三）年の四月には植木一家と知り合っていました。両国の青年会の活動に私も妻も顔を出していました。そこで植木の親父さんといろいろ話すなかで、この人は戦争中に捕まったアカの人らしいとわかった。

今西　反戦坊主ですからね。

川村　そして、親父さんとお袋さんから三重県の部落の話をはじめて聞いたんです。大学の同級生に磯田奨（すすむ）君という中世史を研究していたのがいて、彼の卒業論文が犬神人（つるめそ）についてでした。犬神人って何だと磯田君に聞いたら、島崎藤村の『破戒』に出てくるようなテーマだと教えられました。それ以上のことは言いませんでした。『破戒』は読んでいましたけれど、部落問題として読んではいませんでした。植木に話を聞いてからは観点を変えました。植木から聞いた話を伝えると、磯田君は熱心に聞いてくれたから、もっと突っ込んで聞けば磯田君が部落問題をどう思っていたかわかったかもしれませんけど、ぼくもそれ以上は聞きませんでした。

今西　最初の頃は、初期社会主義の研究をなさっていましたよね、卒業論文からですか。

川村　恥ずかしいこと聞かないでよ。やはり服部之總の影響もあったでしょうか。つまり、資本主義発達史の観点でいろいろなものをみるという。たまたま北海道のことに興味をもって、北海道の開拓を資本主義発達史の観点からみようと思い、岩生成一先生のところに行って、卒論のテーマを明治初期の北海道開拓史にしたいといったら、「そうですか、あなたは北海道のご出身ですか？」と聞かれて、「いいえ違います」、「じゃあ、北海道に旅行されたんですか？」、「いや、まだ行っていません」と答えたので変な顔をされましたが、農学部と経済学部の図書室に紹介状を書いてくれました。あそこはすごいところだね。

今西　それはすごいですよ。資料の宝庫です。

川村　それで卒論はどうにか書いたのですが、ぼくは二年生のとき一九四九（昭和二四）年にはまるまる一年間、労働組合の書記をやっていたんですよ。大学にぜんぜん行ってないんです。

今西　どこの労組ですか？

川村　二・一ストのときの東京の労組の協議体の名残で、東京地方労働組合会議（東地労）というのがありました。

今西　産別会議の系統ですね。

川村　一九四九（昭和二四）年の一月からその事務局にアルバイトの書記として働きはじめました。小学校の同窓の紹介で、全逓（全逓信労働組合）の芝支部と東京地連書記局があり、事務局長が全逓の方だったので、港区の芝郵便局の二階の一角に机を貸してもらってやっていました。そのうちに産別会館ができて、のちの平和と労働会館かな、部屋をひとつ借りて移りました。東地労の事務局には一年余り通いました。労働組合を通して、一九四九（昭和二四）年の社会を見つめることができて、ぼくには貴重な経験となりました。この経験をある公民館で話したら、聞いていたおじいさんが、「先生、そんなことで東大は卒業出来るんですか」と心配してくれましたよ。

今西　できたんですね。

川村　はい。一九五〇（昭和二五）年の初めに、二年生の終わりの年度末試験は受けなければということで試験の時間割を調べに行ったら、まだ授業が残っていたんです。それが遠山茂樹さんの明治政治史、講師としてでした。一九五〇（昭和二五）年度には経済学部でも講義をされていましたけれども、それがおそらく岩波全書の『明治維新』になったのだと思います。遠山さんは、五カ条の誓文の講義をしていました。最後の授業で、「本年度の講義はこれで終わります」と結ばれました。ぼくはこれしか聞いていないで試験を受けました。その答案に遠山さんが朱で、資本主義が高度に発達しているのに、なぜ民主主義が問題にされるのかというぼくの問題意識

を励まして下さったのです。

今西　東大の先生はちゃんと授業をしていたんですか？　経済学部などでは昔はほとんどやっていなかった、と聞いたことがありますが。

川村　文学部はやっていたと思います。一九四八（昭和二三）年の最初のストライキのあとや、ぼくはアルバイトに出てまったく登校してませんが、一九四九（昭和二四）年という年は戦後の学生運動の歴史のなかでも大きな年だったようです。理事会案反対ストで。このときがまさに網野時代から犬丸（義一）時代の頃だったのでしょう。それからぼくの同級生で中世史の福田以久生君もずいぶん活動していたようです。ぼくはぜんぜん知らなかったのだけれど。福田君（一九二五年生まれ）とは年齢がだいぶ違うから、世間知らずのぼくはずいぶん面倒をみてもらいました。会えばいろいろ教えてくれたし、ごく親しかったんですよ。彼が亡くなったときは、新田英治君（学習院大）と二人でお通夜に行きました。

今西　ご自身では学内の学生運動はやっておられなかったわけですか？

川村　一九四八（昭和二三）年の最初のストライキのときは手足となってやりました。

今西　網野時代だったんですか？

川村　いや、入学してまもなくの最初のストライキのときだけです。東大歴研の先輩たちのいる文学部の自治会（学友会）室に行くと、先輩たちからあれこれ仕事を頼まれるんです。そのなかで忘れられないのは、沖浦（和光）さんから医学部に行ってストライキの宣伝をしてくるようにと言われたときのことです。あの頃の文学部は武井（昭夫）・沖浦時代です。何を話したらいいのかと沖浦さんに聞いたら、計画をしゃべってアジってこい、と。医学部は階段教室で、あんなところでしゃべるのははじめてで、ベルが鳴って授業がはじまっているのにしゃべっていたら、先生が入ってきて、警戒の目で見られたから慌てちゃって。そんなこともありました。

今西　沖浦和光さんとはそこで出会っておられるんですね。

川村　そうでしょうね。沖浦さんの視野にはぼくなんか入っていないけど。武井昭夫さんもそうですよ。彼もどうすればいいか、いろいろ親切に教えてくれた。あとで、困ったことがありました。ぼくが三省堂の高校日本史の教科書を書いたとき、読み合わせ会に武井さんが来てね。彼の奥さんが三省堂の社員だったからかもしれない。戦後史の叙述の検討なんかやりにくくてね、武井さんのほうが実践家としてよくご存知なんだから。沖浦さんはいま人気があるんだね、おばちゃんたちに。話が上手だから。

今西　あちこちで講演してまわっていますね。

川村　広島の部落解放研究所へ講演会に行ったときのことだけど、ぼくの前に沖浦さんが講演することになっていて、時間が割り当てられているのに、彼が延々としゃべってさ、終わって控室に戻ってきた時に挨拶はしたけれど、ぼくにはほんの少ししか時間が残っていなかった。次に三重の県民集会でぼくが朝熊闘争の話を頼まれたことがあった。沖浦さんは全体講演と歴史の分科会の助言をやることになっていた。全体講演で沖浦さんが、井戸掘りみたいな研究はいかん、全体のなかでやらなければ、なんて沖浦流の。

今西　アジテーションをやったわけですね。

川村　だからちょっと皮肉ろうと思って、翌日の分科会で、ぼくの話は朝熊っていう地区だけの井戸掘りみたいな話だから、沖浦さんの話には反するかもしれないけれど、と最初にことわった。そうしたら、あとの助言で沖浦さんが、今日のような井戸掘りはいいんだ、なんて。

今西　大人物ですからね。

川村　最初のストの頃は、武井・沖浦の二人は文学部全体、あるいは学校全体を仕切っていた感じでした。上田耕一郎さんの姿は経済学部でみかけた。不破哲三さんのことはぜんぜん知らない。法学部の学生大会をのぞいた

ら、仕切っていたのは正森成二さんだった。

今西　国史のなかでは、共産党が公然と活動していたわけではなかったのですか？

川村　活動している先輩は共産党のようにも思えたけれど、公然かと聞かれると、誰が党員なのかよくわからない。ぼくの上の世代の、荒井信一、小澤圭介、藤原彰、網野善彦さんたちが一九四八（昭和二三）年の最初のストライキの頃、史学科では活動していましたが、翌二四年の理事会案反対のときは、犬丸義一、福田以久生といった人たちが国史をリードしていたと思います。その後のことは何も知らない。公然と共産党が活動していたかどうかということは、ぼくにはよくわからない。

三年生のときはレッド・パージ反対闘争だけれども、国史では表立った活動があったイメージは残っていません。個人的な話になるけれども、ぼくは卒論を書くためもあって、農学部や経済学部で文献を探していました。その年度に講師の近世史の児玉幸多さんが古文書を読む会を開いて下さって、信州追分宿の近世文書を持ってきて、みんなで筆写したりしていました。

今西　児玉さんは、その頃はもう学習院大学の教授でしたか？

川村　ぼくは知らない。【一九三八年学習院教授、一九五〇年学習院大学教授】そこに金井圓とか、青木孝壽とか、福田以久生なんかもいたと思う。そのときちょうど夏休みに、中世史（古文書学の）寶月圭吾先生が、信州の落合村で農村調査をやるというので、ぜひ連れて行って下さいとお願いしました。そんなことでもないと勉強する機会がないですから。この調査はずいぶん印象が深いです。中世史の安田元久さんが助手としてついてきてくれました。寶月さんが飲めないので、酒席になったら引き受けるためにだったらしい、と安田さんが冗談に言っていました。

今西　安田さんは北大から学習院に行かれましたね。

川村　福田以久生が中世、金井圓が近世、青木孝壽が近世、金子廣太郎君が近代の文学史、ぼくが近代、もうひとり一年下の杉山君というのと一緒に一週間近く調査に行きました。まだ複写のカメラも機械もありませんから、わら半紙とえんぴつを持っていって、公会堂に泊まり込んで、暗い電燈の下で書き写しました。読めないと寶月さんと安田さんに訊いて。金子・青木の近世史組はよく読んでいました。地元の人たちとの懇談会があって、うやうやしく「先生、武田信玄のなんとかがあるんですけど」なんて鑑定を頼みにきました。

今西　農村調査に行くとよくありますね。家系図なんか持ってこられて、これは贋作かどうか鑑定してくれと。

川村　寶月さんが一生懸命にみて、「けっこうなものですね、大事にしてください」なんて言っていました。あとで紙質・墨跡・文章・花押など、「お宝」の「鑑定」の仕方を教えていただきました。

今西　偽物だと言ってはいけない、処分されると困るから、と朝尾直弘さんも同じようにやっていました。

川村　ちょうど朝鮮戦争がはじまってすぐのときでしたから、「日本はどうなるでしょうか」、というような質問をされたりもしました。うっかりしたことは答えられませんからね。『史学雑誌』に落合村の報告書が出ましたが、これはみんなが書いたレポートを統一するようにといわれて、ぼくがまとめて清書したものです。最後に学生の勉強のためになった、ということを書いたら、福田以久生君に余計なことを書くなと叱られましたけど、ぼくはそう感じていました。この報告はのちに山川出版社から出た佐々木潤之介さん編の近世農村の調査報告の本に別扱いで収録されました。この落合村調査は、みんなと仲良くなる意味でも、調査の方法を知る意味でも、ぼくにとっては大きな意味がありました。

これが三年生のときの思い出です。やがて卒業が間近になりましたが、ぼくは就職活動

というのをした記憶がありません。大学や研究室を通して、教師や編集者の募集がくるものだとばかり思っていました。ですから、卒業するときまで就職活動をやったことがなかった。福田以久生君は卒業して沼津の高等学校に行きましたが、福田君から埼玉の高校の先生に行かないかという話がありました。同じ時に別なところからも話があって、どちらにしようかと迷いはしましたが、どちらにも行きませんでした。家が貧しかったですから、もっと真剣に就職活動をしていてよいはずなのに、なぜだかよくわかりません。

4　服部之總氏と日本近代史研究会

今西　文学部では就職は厳しかったのではないですか？

川村　そうでしょうかねえ、ぜんぜん覚えていません。同窓の百瀬今朝雄と新田英治と金井圓の三君は史料編纂所に入りました。ぼくは福田以久生君も入るのかと思っていたのだけれど。下川逸雄君が山脇学園に行ったのかな。青木孝壽君は長野の須坂高校に。学校の先生になったものが何人かいます。ぼくは就職先がなくてぶらぶらしていて、国史の研究室に通っていたら、先輩の青村眞明さんがやってきて「おい、川村君、遊んでいるならちょっと手伝ってくれよ」と声をかけられました。この呼びかけがぼくのその後の人生を決めたようなものです。「何をするんですか？」と聞いたら、「いま歴史の画報をつくっているんだ」と。「画報って何ですか？」、「写真や絵画を編集して歴史を叙述するんだ」、ということで、じゃあ手伝いましょう、と史料編纂所の学生研究室に行きました。青村さんがその部屋で作業をしていました。そこには藤井松一さんもいました。彼は浦和高校の先輩でした。

今西　藤井さんはもともと工学部ですよね。

川村　東大の工学部を出て、戦後は農学部に入りなおしましたが卒業はしていません。

今西　藤井さんは浪人時代が長かったですね。

川村　似たような人が多かったですよ。歴史の画報といわれても勝手がわからないでいたら、服部之總先生が「出勤」してきた時に、近くにあった本郷薬局の喫茶室で服部之總編集会議が開かれました。そこに本やら写真やらをたくさん持っていきました。ぼくは、小西四郎、遠山茂樹、吉田常吉、松島榮一、青村眞明、藤井松一、といった先輩たちの後に恐る恐るついていきました。青村眞明さんが写真をたくさん並べて、あれこれ議論しているうちに、様子がのみこめてきました。この仕事は、御存知のように病気で苦しんでいた服部之總さんの救済の意味もあったんですよ。国際文化情報社編集長の不動健治さんという方がいます。同盟通信の従軍記者として南京事件の写真を撮った人です。この不動さんが服部さんと同じ鎌倉山に住み、その息子さんが鎌倉アカデミアの学生だったので、服部さんと親しかったのでしょう。不動さんが編集していた『国際文化画報』に服部さんは「維新前後」という連載をもっていました。それを見て大澤米造さんという画報界の草分け的人物だった社長が、かつて出した『幕末・明治・大正回顧八十年史』（東洋文化協会、一九四〇年）のような写真集を出したいと服部さんに持ちかけたんです。服部さんは自信を持てないものだから、松島さんに相談したんでしょう。それで、これはおもしろいということで、松島さんが小西さんや、遠山さん、吉田さんに声をかけました。史料編纂所の維新史料部にある資料を使えば出来るということだったのだと思います。小西さんたちはみんな史料編纂所勤務だから実務を担当する人が必要だということで、松島さんが藤井さんを口説き落としたらしい。藤井さんは平凡社に就職が決まりかけていたのですが。それでも足りないということで、手術後戻ってきた青村さんを引き入れて、さらにもう一人、というわけでぼくのところにも話がきたわけです。『画報近代百年史』（『百年史』）の編集は、すでに第三集の明治維新にとりか

かっていました。

今西　そのあと色川さんを入れたのですか？

川村　色川さんはずっとあと二年後です。青村さんたちは毎日仕事をしていましたが、ぼくは週三日勤務で、このあとしばらく青村・藤井の手伝いをしていました。この頃、東大の各学部の近代史関係の先生たちが集まって「近代史懇談会」をつくり、科学研究費をもらって近代史資料の調査をやることになりました。近代史懇談会は、遠山さんが事務局長で、小西さん、石井良助さん、林茂さん、古島敏雄さん、安藤良雄さん、隅谷三喜男さん、西田長寿さんといった先生たちが定期的に集まって、新史料の紹介などをしていました。ぼくは遠山さんから話を聞き、岩成生一先生に紹介をお願いして、この会の「助手」のような仕事をさせていただきました。

　この頃信濃毎日新聞社に塚田正朋さん、旧姓万羽さんがいまして。

今西　長野の部落史の。

川村　万羽さんは浦和で遠山さんの同級生で、親友だったんですよ。この万羽さんの案内で科研費を使って信毎の資料調査をやりました。このとき、助手格で行ったのが、古島さんの門下生で新潟県の大地主研究の。

今西　守田志郎さん。

川村　そう、その守田さんとぼくがお願いして連れていってもらいました。この時に、万羽さんにお目にかかりました。またその頃、国会図書館の憲政資料室にも近代史懇談会の仕事で行きました。国史の同窓の松波昭二君とぼくと、守田さんと。守田さんのあと、もう一人、宇都宮大学で林業史をやっていた

今西　笠井恭悦さん。

川村　そう、笠井恭悦さん。よく知ってるねえ、あなた。守田さんとぼくと、大阪読売に行った松波君と三人で、一人が週に二日、週三日通って、井上毅文書のカードを憲政資料室で取りました。守田さんが辞めて笠井さんがきました。大阪読売の松波がやめたあとには犬丸義一君がきました。遠山さんに、「きみ、犬丸君とうまく一緒にやっていけるかね」と心配されましたが、ぼくは犬丸君とは立場も考えも違うんだけど、不思議と相通ずるものがあってね。彼は親切なんですよ。

今西　親切な人ですね。

川村　犬丸君はふだんはぼくの言うことも理解してくれて、仲良かったんですよ。ですから、遠山さんにも、だいじょうぶですよと答えました。いまも憲政資料室にある井上毅文書のカードは、ぼくらがつくったものです。文書は国学院に移ったのかな。

今西　文書は国学院大学が全部持っています。

川村　憲政資料室通いが週二日、近研の歴史画報づくりに週三日という生活でした。この『画報近代百年史』（日本近代史研究会編、国際文化情報社）の終わり頃に、服部之總さんに、「おまえもそろそろ一本立ちしろ」といわれて、近代史懇談会の方は辞めさせてもらいました。憲政資料室の大久保利謙先生をはじめ、多くの近代史の先生方に教えていただいて、幸せな二年間でした。

　『百年史』全一八集は一九五二（昭和二七）年の暮れに終わりました。服部さんは朝鮮戦争までの戦後史をくわしくやりたかったのですが、最初一二集の予定だった画報は一八集になりましたけれども、それでも戦後史は一冊ちょっとしかできませんでした。服部さんはこれを残念がって、戦後史だけで歴史の画報を編集したいといいだしました。『百年史』は売れに売れたので、こんなことが言えたのですが。ついては、戦後史を勉強する必要があるから時間をおきたい、ということで、つなぎに一九五三（昭和二八）年一月から『画報近世三百年史』全一六集（国際文化情報社）を出しました。この編集のために五二年の夏前から、小西さんの同窓の北島正元さん（都立大）に来ていただき、宗教史の村上重良君も入りました。

今西　村上さんもずっと定職がなかった人ですよね。

川村　若者達はみんなフリーターです。彼は、東大の宗教学科の活動家でした。ぼくは

文学部の学生大会で発言する村上君のことを知っていましたから、なんで近研に村上君が来たのかなと思ったのですが、三笠宮さんの紹介だったんです。

今西　おもしろい関係ですね。

川村　三笠宮さんは一九五二（昭和二七）年の三月頃、誰の紹介だったかわからないのですが、『百年史』の編集会議にお見えになって、それからは時々、近研の集りに参加されて、気さくにお話をしてくださっていました。宗教学科の大畠清先生のもとでヘブライ史を学んでいて、そこで三笠宮さんと村上君は机を並べて勉強したそうです。それで親しかった。三笠宮さんは、松島榮一さんの追悼文に、村上君の紹介で近研と親しくなったと書いていたけれども、これは勘違いでね。三笠宮さんにあとでお会いした時に、「あれは逆ですよ。宮様の紹介で村上君が入ってきたんです」と話しました。村上君は近研に来るなり、服部之總さんに政治的なことを質問したというのです。三笠宮さんの紹介で迎えた若者が、まず政治的なことを質問したので、服部さんはびっくりしたらしいです。

もう一人が佐藤昌三さん。色川さんの『明治精神史』を最初に出した黄河書房のかくれオーナーです。明治大学で演劇史をやってきた人ですけれども、松島榮一さんの従弟の親友だったのかな。その関係で来ました。彼は国際文化情報社に就職したんです。社員として近研の仕事を手伝うというかたちで、『近世三百年史』の編集にあたりました。そして青村眞明さんが亡くなったあとに、近研の同人に加わりました。

『百年史』が終わって一九五三（昭和二八）年一月から『三百年史』が出はじめた。ところが、二月か三月に青村眞明さんが喀血したんですよ。その頃に、竹村（民郎）君が京都からやってきた。

今西　大阪産業大学の先生になった人ですね。

川村　竹村君が立命館大学を卒業して、四月に奈良本（辰也）さんの紹介状をもって鎌倉山の服部さんのところに来た。「近研に入れてほしい」と。服部さんもすぐには扱いかねて、いま人はいらないからと断ったんだけれども、入れてくれるまで帰りませんと座り込んだらしい。その頃近研は、大阪の創元社から『百年史』のテーマ別ダイジェスト版を出すというのを服部さんが引き受けて、その第一巻『近代女性史』の準備を青村眞明さんがやっていた。それで竹村君に、青村さんの手伝いをしてくれということになったんです。青村さんは病気療養中ですから世田谷の自宅で仕事をしていて、竹村君が連絡役になりました。しかし五月、結局青村さんは亡くなったんです。ショックでした。

今西　彼を惜しむ人は多いですよね。生きていたらもっと大きな仕事をしていただろう、と。

川村　服部さんも「惜しい男を亡くした」というなだれていました。ぼくは広い視野からものごとを論ずることの大切さを教えてもらいました。青村さんの葬式で、ぼくははじめて色川さんに会いました。それまで色川さんは伝説上の人で、青村さんなど先輩たちから話を聞くばかりでした。　その頃、発足してまもない労働者教育協会が、『社会科学基礎講座』というシリーズものを青木書店から出していました。

今西　当時は共産党系の出版社ですね。

川村　『社会科学基礎講座』の歴史の部分を、青村さんと藤井さんとぼくが分担して書いたことがあって、労働者教育協会から職場の学習会の講師を頼まれました。青村さんは体調が悪かったので、ぼくと藤井さんでやりました。いちど犬丸君が一緒に行ったことがあったんです。そのときは米騒動の話をしていたのだけれども、いくらご下賜金が出たのかという質問が出て、藤井さんもぼくもすぐには答えられず、犬丸君が、たいした額ではないですよ、と答えたんです。その帰りに、組合の書記をやっていた若い女子が並んで歩きながら、「みなさんはきょう勉強してこられたんですか。たいした額ではないですよ、

では困ります」とぼくに言ってきた。三〇〇万円だろうが四〇〇万円だろうが、きちんと金額を言えば、質問した人も納得しただろうに、と。犬丸君にはこの話はしなかったけれども。

今西　市民講座の質問は厳しいですからね。

川村　その後ぼくは公民館の歴史講座の講師をずいぶん長いことやりましたけれども、いつもそのときのことを思い出します。

こんなことをしていた頃、編集室にまた学習会の依頼の電話がきて、藤井さんが受けたのだけれども、ちょうど『三百年史』の追い込みで忙しかったからお話を断ったんです。それをわきで聞いていた竹村君が、「人民に奉仕する精神が足りません」と怒ってね。服部さんにまで食ってかかったんですよ。藤井さんと川村さんには奉仕精神が足りない、と言って。そうしたら服部さんが、「きみは宮川（寅雄）のことをどう思うか」と尋ねた。「戦前の活動家で尊敬している」と竹村君が答えた。服部さんは、「そのとおりだ、しかし宮川の偉いところは、藤井や川村のようなひと世代もふた世代も若い人たちの話を一生懸命に聞いてやるところだ」、と言うんだね。ぼくはそれを聞いていて、服部さんは偉い人だなと思ったね。それで竹村君は結局、近研を飛び出して国民的歴史学運動に参加していった。

青村さんがいなくなって、人が足りなくなったので、ぼくのところによくきていた原田勝正君を近研に誘えないかと服部さんが言ってきました。原田君はぼくのいちばんの親友です。彼はちょうど法学部を卒業して国民金融公庫に就職したばかりでした。服部さんが期待しているらしいよと彼に伝えたら、じゃあ行きます、と。彼は国民金融公庫を二カ月で辞めて、六月から近研に来たんです。国民金融公庫の同期入社に太田一郎さんがいました、歌詠みの。彼は、国民金融公庫の理事にまでなりましたから、原田君も辞めなければそのくらいにはなっていたかもしれない。浦和高校の体操部の仲間から、原田がせっかく国民金融公庫に就職したのに引き抜くとはなにごとだ、責任をとれと言われましたよ。彼は自分で来てくれたんだと言っても、おまえが声をかけたのが悪いと言われて。

今西　その頃、近研ではどのくらい給料をもらっていたのですか？　色川さんは、賃上げして月一万円ぐらいになった、と書いていますが。

川村　金額までは覚えていない。

今西　生活ぎりぎり程度のものですか。

川村　まあそうですね。それも服部さんとのけんかの原因ですよ。

今西　色川さんも書いていますね、食えるだけの給料もちゃんと払わないで、と。

川村　六月に原田君がきたのですが、その頃、「色川君が近研で仕事をしたいと言っている」と小西さんから話がありました。青村さんは亡くなる前に、もう仕事ができないので、川村君に頼むということで、大阪の創元社から最初に出た『写真近代女性史』は、青村さんを引き継いでぼくが編集しました。そのあとは近代演劇史を予定していたので、ちょうど色川さんが仕事をしたいと言ってきているし、服部さんも断る理由がなかったのでしょう、劇団の経験はあるし色川さんはもう論文も書いていましたから。色川さんが来たのは八月末か九月からでした。

今西　藤井さんに学生時代よくお酒を飲みに連れて行ってもらったんですけれど、藤井さんは自分が服部さんの命令で、色川を呼びに行ったんだ、とおっしゃっていました。色川さんは金物屋のようなところでアルバイトをしていて。

川村　服部さんとしては、近研の同人として歴史画報の仕事を担当するのではなく、サイドワークの創元社の仕事の協力をしてもらうつもりだったようです。松尾章一さんに聞くと、「色川は近研の客分だ」、と言っていたそうです。

今西　松尾章一さんは服部さんの秘書をしていたんですよね。

川村　ええ、服部さんの家に住み込みで勉強していました。服部さんは、『百年史』を編集していたときは、ぼくらが書いた解説の原稿に全部目を通して手を入れていました。小西さんのも遠山さんのもみんなの原稿にです。

今西　すごいですね。

川村　ですから、服部之總の大局的に歴史をとらえるという巨視の姿勢が『百年史』には貫かれていますね。つぎの『三百年史』になると、北島正元さんがぼくらの原稿を見てくれましたから、服部さんは原稿を見ることがなくなってしまいました。編集会議にきて意見は言うけれども、服部さんがぼくらの原稿に目を通すということはなくなってしまいました。『三百年史』の途中で青村眞明さんが死んで、原田君と色川さんはきたわけですから、色川さんには服部さんに解説の原稿を見てもらうという機会はなかったわけです。色川さんはどこかで、近研に入ったけれども服部之總は自分に何も教えてくれなかったと書いていますが、それは色川さんの自負もあるかもしれないが、実際にそういう機会が少なくなっていたんです。編集会議や雑談でのことばの端々からぼくらが何かを学ぶということでした。色川さんは服部之總から教わることはもう何もなかったのでしょう。

今西　給料もちゃんと払われないし、それで怒りだしたわけですね。

川村　一九五四（昭和二九）年に『現代史』をやっていたときかな、色川さんが言いだしっぺですが、給料が安すぎるというので、ぼくがガリ版を切って青焼きした給与の対照表があります。吉沢和夫さんは都立北園高校にいたのかな、網野善彦さんを北園高校にひっぱったんですが、吉沢さんから色川さんが都立高校教諭の給与表をもらってきて、それにぼくらの給料をつき合わせて計算したんです。ぼくは労働組合の書記をやっていたから、ガリ版切りはみんなよりできたので、ぼくがガリ版を切って服部さんに提出した。「えっ、印刷されているのか？」と、驚かれた服部さんの顔が忘れられません。そこからですよ、「飼い犬に手をかまれた」みたいに言われることになったのは。

　ぼくは歴史画報の復刻版の「あとがき」に、この「賃上げ闘争」のことを書いておりますけれども、要するに、日本近代史研究会の同人組織をどういうふうに理解するかという問題です。服部さんとしては、食えない若者連中を集めて、自分が仕事をもらってきてみんなを食わせているんだ、という認識だったのでしょう。ぼくらは、服部さんの救済のために小西さんたちが集まってきたということを知っていますから、日本近代史研究会という近代史研究者の集まりがあって、みんなで共同研究と編集をしている、その代表者が服部之總である、と思っていした。同人組織についての理解の仕方を、服部さんのプライドからすれば変えられなかったのかもしれません。このへんがいちばんのネックだったのではないでしょうか。ただ残念なのは、服部さんともっと話し合いを重ねて妥協点を見出すことができればよかったのでしょうけど、今度は服部さん自身が病気を再発させて入院してしまいましたから、話し合いは中断のまま、服部さんのご家族からも恨まれることになったようです。

今西　服部さんは、最後は法政大学に就職したんですよね。

川村　法政大学が社会学部をつくった時一九五二（昭和二七）年に、『資本主義発達史講座』に書いている逸見（重雄）さんが服部さんを呼んだのではないでしょうか、くわしくは知りませんが。服部さんは総長の大内兵衛先生とは親しくしており、碁敵でした。

今西　その頃はもう服部さんはだいぶ悪くなられていて、そのあと病院に入院されたわけですね。

川村　一九五四（昭和二九）年に服部さんが希望された『画報現代史』を出し始めた頃からです。お母様の法事で島根の実家のお寺（浄土真宗正蓮寺）に帰る途中、京都の病院で息子の旦さんと一緒に、たしか胃潰瘍の手

術を受けました。その翌五五（昭和三〇）年に、鎌倉の市長選挙に奔走したあと、病気が再発して、最初は新宿の鉄道病院に入院されて、そのあと順天堂に移りました。鉄道病院の頃は見舞いに行きました。ちょうどぼくは長女が生まれて間もない頃で、服部さんも「赤ちゃんを見たい」と喜んでくれました。順天堂に移ってからが大変だったんです。ぼくは一度も見舞いに行けませんでした。最後になって行きましたが。

今西　絵画資料を出すというのは松島榮一さんの発想だったのですか？

川村　絵画資料というよりは、絵画や写真を使って、ヴィジュアルな、目でみるような歴史の叙述をすることの意味をいちばん最初に理解したのが松島さんで、高橋磌一さんたちと共著で『日本の国ができるまで』（日本評論社）を出しました。これが毎日出版文化賞を受賞したことで自信を得ていたので、服部さんを励ましたのだと思います。ぼくらは写真集ぐらいにしか思っていませんでしたが、『近代百年史』が一九五一年、ちょうど対日講和がまもなくの頃に出た時に、服部さんと小西さんの連名の「発刊にのぞんで」に、二〇世紀の半ばをこえてわが祖国日本は新たな運命の岐路に立っている、その時に一九世紀後半を含む日本の近代の歩みをふりかえることが、今日の立場を理解し、今後の歩みを知るうえでも絶対に必要だと思う、という内容が書かれています。一九五〇年前後という時点の日本と世界の現実をふまえてという、この観点が服部さんの意向で貫かれていると思います。服部さんの思い出話にも書きましたけれども、ペリーの来航を扱った項目に、ペリー艦隊はまず沖縄に寄りますが、それについて、「このときも沖縄が根拠地になった」というタイトルがつけられています。この「も」の字がぼくにはとても新鮮だった。朝鮮戦争で沖縄の基地が重要な役割を果たしている、アジアのなかで重要な役割を果たしている、そういう現実を踏まえて過去を顧みるという観点を、この「も」の字に強く感じました。ですから、絵画や写真を史料として使うという史料学的な意味ではなくて、それを歴史叙述に使うという手法の重要さを知りました。

今西　もちろん現在から見るという観点が重要ですが、歴史学は文献主義というか、文字史料は非常に大事にしますけれども、画像や写真を使い出したのはつい最近ですから、非常に先駆的ですね。

川村　『近代百年史』は服部さんの大筋を読むダイナミックな歴史のとらえ方が貫徹していますが、つぎの北島正元さんをキャップにした『近世三百年史』も、いま見てみると、世界史あり、アジア史あり、日本史あり、政治史あり、芸能史ありで、北島さんの歴史認識の全体構造というのがよく出ていて、ぼくはこの仕事をやらせてもらったことで、歴史を広くみる視野が自然に身についたように思います。近研の歴史画報の仕事を通じて、歴史学や歴史叙述のあり方を教えられました。項目と写真の取捨選択をめぐっては、服部さんや藤井さんが広い意味での政治史的把握を強調すれば、松島やんや青村さんは生活・風俗・芸能を重視すべきと反論するなど、編集会議自体が喧々諤々の議論でしたから。色川さんが入ってきた以降は、ぼくらももう慣れていたので、すいすいと編集が進むようになっていまして、色川さんやぼくらの言うことも取り入れられるようになって、『現代史』や『千年史』（古代、中世）の頃は、『百年史』のときのような活発な議論は少なくなっていました。『千年史』になると、ぼくらは専門家ではないですから、美術史の藤田経世さんや古代史の川崎庸之さんのような専門家が客分として編集会議に出席して下さったので、こちらがいろいろと教えていただきますから、あまり議論にはなりません。

今西　色川さんにはそれが不満だったのでしょう。

川村　『百年史』の編集会議のような議論がなかった点ではそうでしょうね。色川さん自身のレベルが高いですから、色川さんが感動

するような内容というのはなかなか難しいだろうけれども、かつてのような議論がなかったことが色川さんには不満だったかもしれません。色川さんみたいな閃きはぼくらにはないですよ。でも、『千年史』の頃は、色川さんは藤田・川崎、それに宮川寅雄さんたちと、別に文化史懇談会をつづけていたから、それほど不満はなかったと思います。

今西　演劇青年ですからね。宮川寅雄さんが近研に入られたのは何年からですか？

川村　一九五二（昭和二七）年の一月か二月ごろだったと思います。前年の一九五一年に北海道からひきあげて東京に移ってきて、杉並区の荻窪に住んでいました。ぼくは、卒論を書いたことで、宮川さんのお名前だけは知っていましたし、社会運動史に関心がありましたから、宮川さんからいろいろお話をうかがって、親しくなりました。

今西　宮川さんは、北海道へは疎開で行かれたのですか？

川村　熱海事件（一九三二年）のあとで捕まって一九四〇年ごろ出所し、理化学研究所系の理研工業に就職して、北海道（空知）の事業所に赴任しました。

今西　戦後は産別会議の仕事をするわけですね。

川村　戦争が終わって労組運動が各職場で起こるなかで、宮川さんも労働運動に参加したのでしょう。それと北海道産別の副議長をやっていて、一九四八年には共産党北海道委員会の常任委員になったようです。共産党の「五〇年問題」（五〇年分裂）で一九五一年に東京に戻ってきました。そこから日本近代史研究会に入る経緯はよくわからないのです。和光大学の宮川ゼミのOBたちが宮川寅雄を偲ぶ会というのをやっていて、そこで勉強会をするから話にきてくれというので、「宮川寅雄と日本近代史研究会」という演題で話をしたことがあります。服部之總の思い出について書いた文章に宮川さんのことをからめたような話でした。宮川さんは共産党の農民部長をしていましたから、農民運動家や農民運動史研究者のことをよく知っていました。彼の最初の奥さんも、農民運動家の妹さんだったと聞いています。農業問題の桜井武雄さんのような服部さんと共通の人間関係もありましたから、そのなかの誰かが間に入って、宮川さんを服部さんに紹介したのではないかとぼくは推理していました。和光大学OBの勉強会ではそのように喋ったのですが、そのあとでわかったことは、宮川さんが東京に戻ってきて住んだ荻窪の家は、宮川さんの妹さんの嫁ぎ先の持家だった。その連れ合いというのが花王石鹸の方だったらしいんです。

今西　服部さんとは花王石鹸つながりというわけですね。

川村　その義弟にあたる人が、宮川さんを服部さんに紹介したのではないか、というのがいまのぼくの推理です。服部さんは戦争中に花王石鹸の重役でしたから。

今西　宮川さんは美術史の専門家ですね。

川村　でも、最初の出会いの時点では社会運動、共産党関係の活動家というイメージだけでした。ぼくは、近研の取材もあって、宮川寅雄さんと何度もふたりで旅行をしているんですよ。一九六〇年の初夏に、二人で安曇野の碌山美術館に行ったことがあります。松本の開智小学校から穂高の碌山美術館に行き、さらに北上して、宮川さんの友だちがマネージャーをしていた八方尾根のホテルに泊まりました。宮川さんがフロントで記帳しているのを見て、ホテルに泊まるときはそうするんだ、なんて思いました。こういうことには彼は慣れていました。そこから日本海に出て、富山を回って、飛騨の高山に宿をとりました。そうしたら、「善ちゃん、ちょっと行こうか」というのでついていって訪ねた先が、妹さんが嫁いだ家だったんです。翌日、妹さんの墓参りに行きました。宮川さんと親しかった人はたくさんいるだろうけれども、妹さんの墓参りに一緒に行ったのはぼくだけでしょう。その妹さんの夫が、宮川さんを服部さんに紹介したのだと思います。この推理は、当たらずとも遠からず、といまは思って

います。宮川さんは美術史にもくわしいということで、『百年史』の大正期以降の美術史と社会運動史のところはぜんぶ宮川さんが担当しました。

今西　そうすると、美術史家だから宮川さんをとった、というわけでは必ずしもないんですね。

川村　だいぶあとになってからですが、宮川さんと宮本顕治の関係を知る人から、近研は宮川寅雄を入れるべきではなかった、と言われたこともありました。宮本顕治の書いたものでは宮川さんはボロクソに言われていますからね。そのあたりについては、ぼくは立ち入る資格がないけれども、近研同人の歴史家として、美術史家として宮川寅雄さんはぼくが大きな影響をうけた一人です。学問に対する態度や、文化に対する姿勢、美術の見方や考え方というものを、具体的にどういう言葉で教えられたというのではなく、『歴史画報』の仕事を一緒にやるなかで、あちこち取材と見学の旅行をご一緒しながら、自然に教えられていきました。ですから、宮川さんを知っている人の前でぼくが彼の話をすると、宮川寅雄をけなす人もいて、あまり愉快ではないですよ。

今西　資料調査では全国をまわられましたか？

川村　観光旅行のようなものでしたよ。

今西　それは御謙遜でしょう。

川村　史跡や社寺の建造物の写真は撮りました。絵画や写真の複写をすることもありましたけれども。

今西　その資料をいま保存しないともったいないですね。もう現物がないものもあるでしょうから。

川村　複写したモノクロのネガのホルダーがかなりの量になりました。いまも私のところにありますが。『百年史』の頃だと、青村眞明さんなんか神田を歩いて古本を買ってきて、挿図をハサミで切って版下をつくったりしていましたよ。

今西　いまは著作権がうるさいですけれどね。

川村　服部さんが大事にしている本から挿図を切っちゃって。服部さんが、「え？　切っちゃったのか」なんて、青村さんに文句を言っていました。

今西　当時は、古文書だってぞんざいに扱っていましたから。

川村　色川さんの五日市憲法草案だって、アルバムに貼ったらはがれなくなっちゃって。

今西　はがすのが大変だったようですね。近代史史料なんて史料だと思っていませんでしたから。中世史だとわりと大切にしていたようですけれども、近世史だってかなりぞんざいに扱っていました。

川村　宮川さんが近研にきてから、会津八一（秋艸道人）の名前も知りました。一度だけ、会津八一が近研編集室にきたことがありました。

今西　宮川さんは会津八一の弟子ですから。

川村　一番弟子でしょう。

今西　近代史研究会の歴史画報が終わったあとは、どこにも就職されなかったのですか？

川村　つぎつぎと歴史の画報を編集しました。編集がおもしろくて、独自の研究を怠りましたから……。ワーキングプアーの先駆者（？）ですよ。広く売れたのは良かったけれど、ぼく自身は就職する機会を失ってしまいました。

今西　高学歴フリーターの先駆者ですね。

川村　塩田庄兵衛さんが、都立大学と立命館大学を終わって、その後どこだかの大学（流通経済大学）に行きましたけれども、そこも終わってからだったか、ぼくのところに、「いよいよどこにも勤めるところがなくなりました。どこにも勤めなくても生きていける方法を教えてください」なんて手紙を書いてきましてね。冗談だろうと思いましたよ。

今西　ということは、そのあとはずっとアルバイトのようなことをされていたわけですか？

川村　近研の一連の歴史画報を発行した国際文化情報社が、安保闘争の一九六〇年の暮れ

に倒産し、翌年に国文社として再発足することになりました。改めて近代日本の歴史画報をと依頼されて、『図説国民の歴史』全二〇巻を編集しました。以後一九七〇年代の初め頃まで、近研の歴史画報の関係の仕事が、何や彼や続いていました。個人としては、東京オリンピックの一九六四年以降は、主に東京の多摩地域で公民館の歴史講座の講師を頼まれることが増えていきました。近研の仕事が七〇年代のはじめ頃に終わったあとは、週に二〜三か所ぐらい公民館の歴史講座の講師をつとめて、食いつないでいました。

5　部落問題研究の途

今西　お連れ合いは働かれていなかったのですか？

川村　働いていません。保険の勧誘員をしばらくしていたことがありますが。子どもが五人いましたし、身体もじょうぶではありませんでしたから。

今西　お連れ合いのお名前は何とおっしゃるのですか？

川村　眞澄といいます。知り合った頃は珍しい名前だなと思っていましたが、いまはテレビなんかにも何人もいますね、男も女も。

今西　ご兄弟の植木等さんとは交流はあったんですか？

川村　三月一〇日の空襲で焼け出されて転がり込んだ両国の相撲の鳳部屋が、ぼくが戦後に浦和から帰ってきた頃に三輪工業という貴金属会社に売却されて、社員寮になりました。等の父親は一九四一（昭和一六）年に出所して、三重県の大湊の造船所でアルバイトをしていたのだけれども、もともとは御木本幸吉の貴金属会社の彫金職人でしたから、御木本時代の同僚の紹介で三輪工業に就職したのです。会社は、東京の足立区西新井大師のあたりにあって、そこの女子寮の舎監というか職務で、植木一家は西新井に住むようになりました。そこが一九四五（昭和二〇）年四月の空襲で焼け出されて、三輪工業は、刃物で有名な岐阜県の関に疎開します。植木一家も関に二〜三年いたらしいです。等は、東洋大学から勤労動員で北海道へ援農に行っていた。戦後戻ってきて父親のいる関まで行って芸能界に入りたいといったら、おまえなんか芸能人になれるわけがないだろうと親父さんに反対されたらしい。植木徹之助も声がきれいな人でね。若い頃は義太夫なんか唸っていました。

三輪工業が両国の相撲部屋を買って、一九四七（昭和二二）年かその翌年かはわからないけれども、植木一家は関から両国に移ってきたわけです。ぼくが東大に入るために浦和から戻ってきた時には、植木一家はもう両国の三輪寮にいました。両国二丁目の青年会に顔を出すうちに眞澄と知り合って、また親父さんが戦争中捕まったアカの人だということも住民のあいだでは知られていましたが、いろいろ話を聞いてみると、戦争に反対して捕まったのだということがわかった。しかも、話に出てくるのは部落差別のこと。戦争中自分が三重県でやったことは明治維新（地租改正反対一揆）以来の大きな闘争らしいんだ、なんてことを話すのです。どういう意味の闘争かはよくわかりませんでしたが。母親のいさほからも部落差別のことをよく聞きました。

島崎藤村の『破戒』はすでに読んでいましたから、そこに出てくるような話なのかとは思いましたが、『破戒』は明治時代の長野県の話で、植木の話はつい最近の戦争の頃の三重県の話です。『破戒』のような話は、三重県では戦争中もあったのかというのが部落問題に関心をもった最初です。せっかく東大に入って日本近代史を専攻する道を選んだのだからすぐに取り組めばよかったものを、そういうこともあったのか、というぐらいでした。興味をもつ素地など、ぼくにはありませんでした。

今西　東京では実感もないですよ。

川村　東京育ちの人間にはとても実感がわかない。でも、植木の話は戦争中にこんなこと

を考えやっていた人がいたのか、と驚きでした。挙国一致しか知らなかったから。

今西　反戦運動をやっている人がいるなんて思わなかったでしょうね。

川村　その後、共産党の活動や労働組合の書記といった社会運動にいろいろな立場で関わっていくと、植木の話がだんだん生きてくるわけです。いつかは親父さんの話のことを調べてみようかなと思いはじめました。結婚してからのことですが。結婚したのは一九五三（昭和二八）年です。

今西　植木さんのお父さんの方はいつごろまでお元気だったのですか？

川村　一九七八年二月です。一九七七年の一〇月か一一月に植木等が北条秀司作『王将』の坂田三吉をやったんですよ。偶然ではありますが、部落問題がらみの話です。それが徹之助が等の舞台をみた最後です。『王将』の坂田三吉役といえば当然、映画の坂妻（坂東妻三郎）とか舞台の辰巳柳太郎が有名ですが、新聞などの劇評では好評で、坂妻・辰巳に並ぶと書かれて、等は機嫌がよかったと思います。『王将』の舞台の終わりの方で、将棋に負けて「坂田将棋の出直しや」みたいなことをつぶやきながら奥に引っ込む場面があって、それが植木徹之助にそっくりだったわけよ。妻ともお父さんにそっくりやなと話していたのですが、父親も、「等、なんでぼくの真似をするんだ」なんて言っていましたよ。それから間もなく、親父さんは老衰のような感じで寝込んでしまいました。

今西　『王将』でも、坂田三吉が被差別部落の出身だということはあまり言われていませんよね。

川村　堺の舳松（へのまつ）にいけば資料館もあるんだから（舳松人権歴史館坂田三吉記念室）、ちゃんと書けばいいのに。

今西　彼が名人になれなかったのは部落差別ですね、実際は。関根（金次郎）名人に勝っているわけですから。川村さんが、部落問題を研究対象としておやりになりはじめたのは、いつごろからですか？

川村　いろいろなきっかけがあります。早くに植木から話を聞いていたこともありますが、その当時は関心のもちようがなかった。安保闘争の一九六〇年初めに亀井文夫監督の映画『人間みな兄弟』を観ました。あの映画のなかで、保土ヶ谷（神奈川県）の刑場と思われる写真があって、穢多か非人かが警備している、刑死者のさらし首が写っていました。明治大学の刑事博物館にある写真だと思う。亀井文夫さんは早稲田大学の出身ですから、同窓の宮川寅雄さんに刑場の写真が欲しいと依頼があって、宮川さんがぼくに訊いてきた。それで近研で使わなかった写真のなかから探したら保土ヶ谷の写真が出てきた。

今西　よく覚えています。強烈な写真でした。

川村　その写真を提供しました。つい二～三年前に近代部落史研究会で黒川みどりさんが、『人間みな兄弟』のビデオをもってきて映写してくれました。観てみたら、刑場の写真はトリミングされて二～三箇所に出ています。その関係で、映画の試写会の招待状が宮川さんのところに届いて、一緒に試写会を観に行きました。植木から聞いていた話を現実の映像として目の当たりにして、ショックでした。宮田輝のナレーションで「六〇〇〇部落三〇〇万人」と聞いた。明治初年の賤民人口が五〇万人ぐらいで、総人口が三五〇〇万人。戦後は総人口が一億人ぐらいですから、明治以降の一般人口の増加が三倍足らずなのに、五〇万人が三〇〇万人では六倍になります。これはおかしいぞ、と思った。部落問題はもともと「穢多・非人」の問題だから近世史の問題だと思っていた。けれど、明治維新以降にこんなに増えているのはなぜか、これは近代史の問題でもあるのではないか、これは変だぞと疑問をもちました。

　翌六一年三月、水平社創立四〇周年を記念する東京の集会が浅草公会堂でありました。新聞でそれを知って、近研の帰りに行きました。浅草公会堂はまだ昔の建物でした。いまから考えると、東京部落問題研究会ができた

ばかりで、その幹事の若い人たちが参加して手伝っていたのでしょう。講演をやったのが、田中織之進と北原泰作。北原さんの話は彼らしい演説口調だったから、あまり感銘は受けなかったけれども、田中織之進の話は、出身地の和歌山での体験談のような話で印象に残った。

同じ六一年秋に部落解放国策樹立要求運動が起こって、九州からのデモ隊が東京まで来ました。名古屋で三重県隊が合流しました。三重県隊には伊勢市の朝熊の地区の人たちが参加していた。かつて植木も一緒に闘争をやった人たちです。東京での行動が終わったあと、彼らが植木のところに泊まったんですよ。ぼくがちょうど部落問題を勉強しようかと思っていた時期です。植木から話があるから来てくれと連絡があった。そうしたら、このまえ朝熊の人たちが泊まりにきて、こんな話をしていった。戦争中にわれわれがやった闘争は、三重県では明治維新以降三つか四つに数えられる大きな民衆闘争だといわれている。しかし、あの闘争を闘ったわれわれ自身が、闘争の全体がどうだったのか整理してない。総括をしていない。そこで、関係者がまだ元気でいるうちに記憶をたどり、資料を集めて、あの闘争がどういうものだったのかをまとめて、若い世代に残したい。われわれの闘争の結果として、いまの朝熊の状態があることを、若い人たちにわかってもらいたい、この調査をおまえやるか、という話になった。それがほんとうに直接のきっかけになりました。

ぼく自身も、部落問題とは何か、日本近代の歴史の課題として考えなければと思い始めていました。植木に以前から聞いていた話を改めて聞いてみたいと思っていたので、ぜひやらせて下さい、とお願いしました。一九六一（昭和三六）年一〇月ぐらいのことです。それからは、手当たり次第に部落問題関係の本を読んだ、読んだ。一通りのことはすぐにわかるけれども、ちょっと突っ込むとわからないことが多くなる。

今西　あの頃では、まだそれほど研究もありませんでしたからね。

川村　井上（清）さんの部落問題の研究も読んだし。

今西　奈良本（辰也）さんのも。

川村　奈良本さんのも読んだ。それで、一九六二（昭和三七）年の正月三日に東京を出て、植木夫婦とぼくの三人で名古屋へ行って、植木の弟（港湾労働組合の活動家の植木保之助）のところに泊まりました。四日に伊勢へ行って小俣町の西光寺に入った。そこに、植木の若い頃からの同志である小俣の西中六松さんが来て、その晩に一緒に朝熊地区へ行きました。ぼくは部落に行くのははじめてです。部落問題の本を読むとみんな貧乏でひどいところだ、とあの頃は書いてありましたし、映画『人間みな兄弟』に描かれているようなところを想像していました。

今西　当時は、都市部落はとくに悲惨ですからね。

川村　朝熊川に架かる小さな出口橋を渡って、緊張して地区に入りました。見ると、なんだ農村の風景と変わりないじゃないか、と意外でした。

今西　農村ですと、家の造りも大きいですし。

川村　あとでよく見ると、道は狭いし、家が河川敷に建てられていたりして大変なんだけれども、一見したところでは農村と変わらない。道はたしかに狭く入り組んでいたですよ。だけども、あれ？、本に書いてあることとは違うという感じでした。

その晩、植木にしてみれば検挙されて以来二五年ぶりですから、当時の若かった闘争の同志たちが中西長次郎さんの家に大勢集まってきて、ぎゅうぎゅう詰めでした。こちらは、思い出話をじっと聞いているうちに、これは深刻な問題だなと感じました。どんな話だったかはよく覚えていないけれども、ショックだけはすごかったです。外見と実際とではえらい違いだ、と。

今西　そのとおりでしょうね。差別のキツさ

というのは外観だけではなかなかわかりません。

川村　とにかく、そのショックだけは覚えている。これは生半可なことではいかん、と思った。

今西　でも、研究条件としてはものすごくいいんですよ。われわれが同和地区へ行って調査しようと思っても、そんな簡単に資料を見せてくれたり話を聞かせてくれたりはしないですから。何をしに来たんだ、という感じですよ。植木さんのような人と一緒にいけば、ある程度は話してくれますよ。

川村　ぼくが一人で松阪などに行くと、戦前からの活動家のみなさんが、植木さんの婿さんだということで迎え入れてくれますから、得をしました。ちょうど、植木等のスーダラ節が売れに売れている頃です。三重に行く近鉄特急に乗ったら、子どもたちがあちこちで「スイスイ、スーダラダッタ」とやっているわけです。そうすると、等まで、植木徹之助と同じような目でみられる。だけど、等は部落問題や部落解放運動に直接的に関心をもっているわけではないし、なんで親父は家族に苦労をさせてまで社会運動をやったのか、という程度でした。親父がやったことは悪いことではないとはよくわかっていたけれども。

今西　等さんも晩年、講演会でお父さんのことを話したりしていますよね。私は、三重では松阪の花岡地区に最初に入ったんです。花岡部落の調査や上田音市さんなどの話を聞いたんです。ちょうど三重が郷里の黒川みどりさんが大学院生で来ていました。

川村　京都の部落問題研究所の雑誌『部落』に松阪市長の梅川文男さんと植木徹之助の対談を載せてもらったことがあります。対談は松阪でやりましたので、木全（きもと）久子さんと東上（高志）さんが一緒に京都から来てくれました。木全さんが研究所に入って最初の仕事だったとつい最近に聞きました。松阪の大山峻峰さんがあいだに入って連絡をつけてくれました。梅川さんの活動歴と植木の活動歴とではずいぶんすれ違いが大きく、二人が一緒に活動した機会が無くて、話がなかなか重なりませんでした。大山さんの発言は梅川さんに、ぼくのは植木に入れて、その対談を木全さんがうまく整理して下さいました。

今西　三重といっても広いですから、動いた範囲も違うのでしょう。

川村　梅村さんは兵庫でも活動されていましたから。大山さんは朝熊にも出入りしていたようです。朝熊のことは資料があまり残っていなかったんですよ。最初に問題の輪郭がつかめてきたのは『社会運動の状況』でした。法政大学の松尾章一さんが紹介してくれて、図書館でマイクロリーダーで読みました。「朝熊」と出てきたときは感動したね。すぐに書き写しました。原本はあとで復刻されました。

今西　いまは簡単にみられるようになりましたね。

川村　輪郭がつかめてきた頃、一九六五（昭和四〇）年か六六年に植木徹之助と一緒に伊勢に行く機会がありました。松阪のみんなと会いたいというので、松阪にいくことを大山峻峰さんに伝えると、梅川さんが植木徹之助を迎える懇親会を設定してくれました。戦前の水平社、農民組合の活動家が大勢集まりました。梅川・大山のほか、河合秀夫・遠藤陽之助・中世古基・北村市郎、そして上田音市、朝熊の中西長次郎さんも一緒でした。このとき、上田音市さんに朝熊関連の資料が少ないことを話したら、「うちにある資料が朝熊のことだったと思うから、取ってくるよ」といって持ってきてくれました。これが決定的だった。いちばんの根本資料があると、やっぱり嬉しいよね。一九二七（昭和二）年に朝熊ではいちど闘争がありましたが、そのときの資料を県の職員が筆写したものと、一九三五（昭和一〇）年の植木が行ってからの闘争の時に県の職員が書いたものとが、綴じてありました。「どうしてこの綴りを持っているのですか」と上田さんに訊いたら、一九四五（昭和二〇）年の八月一五日のあとに県庁に行ったら文書をぼんぼん燃やしていたと

ころで、たまたま職員の一人が「これは上田さんに関係のある資料ではないですか」、と渡してくれたそうです。この綴りの資料で、朝熊の問題の内容がほぼ明らかになりました。

今西　そんな偶然があったんですか。私は、上田音市さんの聞き取りに何回か行ったことがあるんです。本にもなっていますが、いい人だったですね。

川村　親切ないい人でした。

今西　戦争中は、全農全国会議派の運動もやった人です。戦時中の「転向」問題などはありましたが。

川村　戦争中の言動については、いまの若い人からみれば、なんでこんなことをやったのかと思うところもあるだろうけれども、運動をつづけるためには、そして自分が生きるためにはやらなければならないこともあった。いまからは批判されるようなことでも。問題は戦後、それを自分なりにどう反省し整理されてきたかです。

今西　拒否できない時代がある、ということが若い人にはわからないのでしょう。拒否したら殺されるという時代があった、ということを。

川村　嫌だったらやらなくてもいいですよ、とは権力の側は言ってくれないから。植木を囲む懇親会の席で上田さんが、自分はなんとしてもこの運動の伝統を守りたくてと、戦争中のご自分の言動をお話されました。運動を守るということを理由づけにしていましたが、そこにいた人の中には、上田さんもあそこまで言わなくてもいいのに、という反応もありました。

今西　弁解するほど苦しくなりますからね。合理化することになりますから。運動史の難しいところです。そのあと、東京の部落研（東京部落問題研究会）の活動に参加されたのですか？

川村　東京部落問題研究会に参加したのは一九六四年です。三月の三日と四日に解放同盟（部落解放同盟）の大会が福岡でありました。全国水平社の総本部から朝熊闘争の指導に当たった井元麟之さんに一度お会いしたいと思っていたから、福岡まで行き、井元さんのお宅を訪ねました。井元さんの勤務先の千代隣保館を見学し、ご実家の松源寺にもお詣りして、実兄のご住職の佐々木慈寛師にお目にかかりましたが、佐々木先生は演劇の造詣が深い方でした。また先生が服部之總と親しい関係であったお話にはびっくりしました。服部さんが三高生の頃、佐々木先生も京都で修行中で、共に本願寺の民主化にために奔走されたらしのいのです。

　部落解放同盟の大会を傍聴しましたが、答申の評価をめぐってすごい議論でした。

今西　分裂のきざしが出ていた頃ですよね。

川村　解放同盟は統一体ではないのか、と思いました。ぼくは運動には期待して甘いんですよ。六〇年安保であれだけの大きなもりあがりがあったにもかかわらず、秋になって総選挙をやったら自民党に票が集まりましたでしょう。あちこちで六〇年安保闘争の総括をやっていましたが、やればやるほど組織の対立と分裂がありました。日本の革新思想や革新運動にはなにか欠陥があるのではないか、と思いはじめました。明治期以来の社会運動の歴史をかえりみても、同じようなことを感じました。ぼくは社会運動や政治活動には傍観者のようなものでしたけれども、なにか欠けているのではないか、と。それが一つには、人権意識の問題だと思った。人権意識の未熟というものを考えていた時に、ちょうど植木から朝熊調査の話があって、これも人権問題だと改めて思ったわけです。

　その頃、人権問題に関する運動で組織の統一を保っていたのは原水禁運動と部落解放運動だった。ところが、ぼくが人権問題（朝熊調査）に取り組みを初めたらまもなく、原水禁運動がソ連の核実験の評価をめぐる対立から分裂しました。解放同盟は、井上清さんに内情を訊くと、なんだこれは、というたいへんな状態でした。

今西　私は京都ですから、目の前でみていま

した。部落問題研究所の封鎖事件など、すごかったですよ。

川村　ぼくはすでに京都の研究所に通いはじめていました。東京の部落研は六四年からですが、京都の研究所には六二年の三月からです。赤井達郎さん、ご存知ですか？

今西　知っています。美術史の先生ですね。

川村　河出書房の『日本歴史大辞典』の編集で知り合いお世話になりました。この辞典は服部さんのお声がかりでしたが、服部さんはぼくら近研の若者連を編集スタッフに使えなかったんです。それで親しい奈良本辰也さんに協力を頼んで立命館を中心にした編集スタッフが編成されました。そうしたら一九五六（昭和三一）年の三月に、服部さんが亡くなってしまいました。奈良本さんが心配して、近研の若い人たちが仕事がなくなって大変だろうから、だれかを河出書房の辞典編集部に入れたらどうか、と言って下さった。でも、近研の画報編集はつづいたので、その仕事の方がおもしろいから、だれも行こうとしない。結局、いちばん生活に困っている者が行けということで、ぼくが行くことになった。辞典の活字ではなくて、挿図の編集をやりました。『日本歴史大辞典』の初版の写真部分は全部ぼくが担当したものです。ぼくが自分で資料を全部集めたわけではなくて、美術関係は赤井達郎さんが送ってくれました。仏像関係の写真だけでもたくさんありました。それで赤井さんと知り合ったのです。京都の研究者ではいちばんに親しくなった人です。近研の取材で、宮川寅雄さんと京都旅行をしたとき、いちど桂離宮か修学院離宮に行きたいと宮川さんが言うので、赤井さんに手紙を出してお願いして、桂はだめでしたが、おかげで修学院には行くことができました。

植木の話から部落問題に取り組みはじめて、一九六二（昭和三七）年に京都の部落問題研究所に行きたくて、奈良本さんに手紙を書いた方がよかったのかもしれないけれども、赤井さんにまず手紙を出した。朝熊闘争や義父のことを調べたいので、調査と研究の相談相手になってくれる人を紹介してほしいとお願いしました。そうしたら、馬原（鉄男）さんを紹介してくれたんです。

今西　いちばん仲のよい先輩後輩でしたから。馬原さんの就職を世話したのも赤井さんです。

川村　立命館の広小路の校舎に行って、日本史の部屋に入って、馬原君と握手したことは、いまも忘れません。

今西　馬原さんも好男子でしたね。

川村　話がさかのぼるけれども、一九五〇年にぼくが大学三年生になって、母親に、大学を卒業するには卒業論文を書かなければいけない、でも労働組合で働いていたら論文が書けない、だから一年間大学に行かせてくれ、と頼んだんです。とたんに収入がなくなりました。それで、遠山茂樹さんのところに、アルバイトをさせてくださいとお願いにいきました。最初にやったのが、『現代用語の基礎知識』の一九五〇年版です。歴史関係の項目を遠山さんが頼まれていたので、これでも書いてみたらと言われて、それがぼくの原稿のアルバイトの最初でした。これはすぐに終わってしまったので、他にないですかと遠山さんに重ねてお願いしたら、福村書店の中学生歴史文庫の一冊を手伝ってほしいと言われました。

今西　奈良本さんも書いていましたね。

川村　世界史と日本史が一二冊ずつありましたが、あれは服部さんと福村書店の関係だったんです。福村書店の社長は服部ファンだったから。

今西　立命館の先生がたくさん書いていました。

川村　服部さんから奈良本さんに話がいって、立命館関係の先生が何人も関わって、東京では服部さんの友人で、田中惣五郎さんや遠山茂樹さんなんかが書いた。いまではこんなに優れたスタッフを大勢は集められませんよ。

今西　北山茂夫さんも書いていました。

川村　あとで馬原君に訊いた話だけど、彼は

あのシリーズを読んだことが歴史学を志すひとつのきっかけになったらしい。

今西　あれを読んで、九州の学校の先生をやめて故郷を出てきたんですよ。あのシリーズは立命館の先生がいちばんたくさん書いているから、立命館がいいだろうということで立命館に来たんです。奈良本さんが編者になっていましたから、立命館の先生が多いのは当然なのですが。

川村　なるほど。林屋（辰三郎）さんも書いているしね。

今西　林屋さんも書いていますし、奈良本さんも書いていますし、北山さんも書いていますし、前芝確三とか前田一良とか、立命の先生ばっかりです。それで、立命が日本でいちばんいい大学だと思って来たんです。

川村　東京のほうは、服部之總、田中惣五郎、松島榮一、遠山茂樹、高橋磌一、杉原荘介、江口朴郎。そっちの方が多いね。

今西　東京は大学がばらばらですね。

川村　あのシリーズで思い出すのは、近研の画報編集が始まっていた頃だけど、服部さんが、松島さんの『太平洋戦争』を読んで、「松島君は、ぼくが学界に復帰する手引きをしてくれた恩人だ。『太平洋戦争』は未熟だけれども、戦後最初の太平洋戦争史だ」とほめていたことです。

今西　松島さんは近世史ですから、太平洋戦争が専門ではないですからね。

川村　遠山さんの『平和を求めた人々』。ぼくがアルバイトを頼みに行ったら、遠山さんから「近代日本の平和の思想と運動」というテーマを与えられて、下書きを書いてみたらと言われたんです。どういうことを書こうとしていたのですかと訊いたら、明治期を中心に、戦争と平和にかかわる自由民権や社会主義の思想と運動のことだ、と。

今西　それで、社会主義に興味をもたれたんですか？

川村　そうね。日露戦争のときの非戦論、幸徳秋水とか、内村鑑三や与謝野晶子のことなど、そこから平和運動とか、社会主義とかに興味がひろがっていった。ひろげっぱなしですが。ただ、ぼくが幸いだったのは、のちに公民館で話をする機会が増えてきて、『平和を求めた人々』や近研の画報編集で、それまでやってきたことを、庶民向けに語るために整理することができたことです。

今西　そういうところでは、やはりひろい話ができないといけませんからね。

川村　東京の武蔵野市には、かつて中島飛行機の巨大な軍需工場がありましたから、マリアナ基地のB二九による東京空襲の最初なんですね。若い高校の先生が、いまアメリカ軍の資料をいろいろ調査されていますから将来の成果を期待しておりますが、米軍資料をみて、こことここに爆弾が落とされた、ここで何人死んだなどの話をしている。だから、ぼくはそんな観光案内みたいな話は研究会でやればよい、市民に対しては中島や空襲の体験を通して、アジア太平洋戦争が何であったのかなど、もっとだいじな話をすることが大切だ、と言うのです。ぼくは公民館学習で育てられたから、そう思うのかもしれません。

一九五〇（昭和二五）年に卒業論文をそっちのけで『平和を求めた人々』の下書きを書きましたが、ぼくが書いた原稿は、遠山さんがたくさん手を入れて下さって、序文のところで、ベンジャミン・フランクリンの「良い戦争、悪い平和などあるはずがない」という引用と、本文は点とマルくらいしか残っていなかった。でも遠山さんは、最後のところで、本郷新のわだつみの像の説明をしながら、「わだつみの像が訴えているものを心にきざんで、私は友人川村善二郎君とこの本を書きました」と書いて下さいました。この本はぼくの宝物です。最後の清書をしながら、ぼくは、日本近代の歴史と、その中の戦争と平和の思想と運動について勉強をさせていただいたのですから。

馬原君との出会いから話がさかのぼってしまいましたが、朝熊闘争の調査は一九六八（昭和四三）年にひと段落して、雑誌『部落』に書かせてもらいました。それからも毎

年のように朝熊に通いました。ぼくが少しでも人間らしく生きることができるようになったとすれば、それは朝熊のおかげです。もうひとつぼくにとって大きいのは、一九七〇（昭和四五）年から広島県で部落の調査をしたことです。

今西　部落の調査をされたんですか？

川村　広島県の東部と南部、つまり尾道、三原、大崎下島、竹原、福山市の北の方にある新市の実態調査の歴史部門を担当しました。門田秀夫さんに誘われたんです。これも人のつながりで、馬原君と門田さんとは仲がよかったんです。いつか京都に行ったとき、門田さんと二人で馬原君のところに泊めてもらいました。

今西　馬原さんは、お客さん大好き人間ですから。

川村　ぼくは京都ではいつも馬原君の書斎で寝かせてもらっていました。

　ぼくと門田さんとはかなり性格が違うと思うのだけれど、意気投合しました。違うから意気投合したのでしょう。二人で話すときは、いまでも、門ちゃん善ちゃんの仲です。馬原君の家に二人で泊めてもらった時に、こんど広島で部落の実態調査をするというので、ぜひ一緒にやらせてと頼みました。一九六九（昭和四四）年一二月に門ちゃんから、一月に尾道市で調査をするから来るようにという電話がありました。そうしたら、一二月に広島の解放同盟が割れたんです。広島に行ってみたら二つに分かれていました。門ちゃんは、広島の解放同盟の小森（龍邦）さんの後援会長のような立場でした。

　尾道市の実態調査はショックでした。まさに、映画『人間みな兄弟』に出てくるような部落の状態そのものを直接に見聞した思いでした。その調査では、尾道の行政の職員に朝、昼、晩と、あちこちの地区へ連れていってもらいました。

今西　その頃は、行政にも熱心にやっている人がいたようですね。

川村　行政が同和対策の資料とするための実態調査ですから。東京に戻ってきて、部落研で友人たちに調査のときの話をいろいろしたら、公開講座で話をすることになりました。それで報告をしたら、聞いていた先輩から、「君が広島に行ったのは解放同盟の方だったのか、君も敵に回ったのか」と詰問されました。びっくりして別の先輩に事情を話たら、「それは苦労したね。自分の信ずる道を行けばいいよ」と励ましてくれました。

今西　分裂のときはすごかったですね。駒井兄弟などは兄弟で対立していましたから。

川村　それから二〜三年して、尾道市役所の職員研修に呼ばれました。ぼくを引っ張り回してくれた人が同和対策室長になっていて、ぼくを講師に呼びました。研修の前の晩に尾道に着いたら、彼が「善ちゃんを呼ぶの、大変だったんだよ」、と言うのです。講師としてぼくの名前を出したら、この人は東京部落研の何々一派だからだめだ、という反対が出たらしい。何派だろうと、どこ派だろうと、尾道の実態調査を一生懸命やった人の話を聞くことのどこが悪い、と彼がおさえてくれた。それで無事に研修をすませてから、しばらくしてまた尾道に行ったら、彼が、「善ちゃん、またやられてるね」、と。地元の共産党の新聞に、「朝田（善之助）・小森派講師川村善二郎」なんて書かれていたそうです。

今西　あの頃は私も、大学の非常勤で同和問題を教えに行くのに、研究所派か解放研派かということを、いちいちはっきりさせなければなりませんでした。あっちの派だからだめだ、と断られたりしたこともありました。

川村　東京でも行政職員の人権研修の講師を選ぶ時には、そのような配慮があったらしいです。そのうちに慣れてしまったから、ぼくはどちら派でもいいから、どうにでも言ってくれ、という気持ちになりました。その後のことですが、赤井達郎さんと、広島で知り合った憲法学の高野真澄さんが奈良教育大学にいましたから、奈良教大の同和問題の講師に来ないか、と誘ってくれました。ぼくは代々木系とみられている東京の部落研の幹事

だけど、とお二人に訊いたら、とにかく応募してみて、努力するからと言われるので出してみました。結局はだめだった。僅差だったそうですが。

今西　赤井さんは好人物ですよね。

川村　馬原君は気に障ったらしい。赤井さんが奈良教育大に誘うとき馬原君にぼくのことを訊いたらしいんだ。馬原君はぼくが一九七〇年代以降、尾道の調査に参加したことを知って、カチンときていたようです。一九八〇年の秋に藤井松一さんが亡くなったとき、通夜の晩に四条辺で馬原君と一緒に久しぶりに飲んだ。「なんでぼくの真意もたしかめずに批判するんだ」と言ったら、彼は「そんなこと言ってない、言ってない」と手を振っていました。日本資本主義論争の頃の愚をくりかえすまい、というのが、その夜の語らいの二人の結びでした。

今西　馬原さんは、飲んだらみんなおともだちですから。教条的な人ではありませんね。

川村　馬原君は、大阪の解放研究所の人と京都で飲んでいたら、学生が不思議そうな顔をして出ていったらしい。

今西　包容力のある人ですから。

川村　そのへんが東上君とは違うところなんだろうね。

今西　東上さんは固い人ですからね。馬原さんの方が柔軟でした。私は、解放同盟分裂前から人間関係がありました。中村拡三さんなどは小学校の恩師ですから、朝田派に行ったからといって仲悪くなんかできません。両方とつきあっていました。ですから、運動は本来分裂すべきではない、という立場です。

川村　柏書房で『部落史用語辞典』を出していますが、あれはもともと一冊で出すわけだったんですよ。ぼくは柏書房の社長の高橋満さんと縁があって、社内研修にも何度か呼ばれました。そうしたなかで、『部落史用語辞典』を出すという話があって、ぼくも編集委員となって協力しましたが、前近代の分量が増えたから先にこちらを出す、ということになりました。近代の方は改めて、京都で東上、馬原、京都部落史研究所の師岡佑行、秋定（嘉和）、大阪の解放研究所の村越（末男）、東京からはぼくが入りました。そういう顔ぶれでしたが、ぼくが鎹（かすがい）の役割をはたすようなかたちで、『部落史用語辞典』の近代編の編集作業を進めました。柏書房の社長や編集者とは何度か一緒に京都に行きました。

今西　柏書房は感謝していたんですよ、『部落史用語辞典』は両方のグループが入っていることで、よく売れましたから。

川村　一九八六（昭和六一）年三月、服部之總さんの追悼講演会を開いた時に、前近代の編集に参加された脇田修さんにお目にかかり、挨拶したら、近代の方を応援するからと言って下さいました。でも東上君が、雑誌『部落』に師岡さんの京都部落史研究所のことを書いたこともあって、近代編は項目の選定までいっていたのにだめになった。

今西　東上さんは、解放同盟に糾弾されて立命館の講師をやめたりしましたから、よけいにきつかったんでしょう。馬原さんは、直接そういうことをやられたことはなかったですからね。

川村　大賀正行さんと馬原君は親しくて、よく飲んでいたそうですね。

今西　馬原さんは、お酒を飲んだら「人間みなきょうだい」ですから。飲み屋で会ったら、みんな兄弟、ともだちのような人でした。まわりもわかっているから、あまりうるさく言わなかったのでしょう。それだけ愛されていました。

川村　ぼくは植木徹之助から朝熊調査の話を聞いて、部落問題の本をむさぼり読みましたが、馬原君をつうじて京都の部落問題研究所に行くようになってからは、雑誌『部落』のバックナンバーを、当時研究所にいた横井清君から、たくさんいただきました。その中で、馬原君が部落のルポをたくさん書いていますが、これがすばらしい。

今西　今でも本にしたいくらいです。

川村　あのルポを読んで、部落と解放運動の

現実を知り、調査の心構え、姿勢と方法などずいぶん刺激を受けました。

今西　馬原さんの葬式には延べ二〇〇〇人集まったんです。二〇〇〇人の焼香の列が出来る学者なんていないですよ。

川村　ぼくは知ってたら行ったんだけど、知らなかったんだ。悪いことしたよ。だいぶたってから、追悼文のような記事を読んでようやく知ったんです。

今西　私の文章まで赤旗でほめてくださっていましたでしょう。

川村　あれは、みなさんの論文集の書評でしょう。

今西　あそこで私が馬原伝を書いて、ほめていただいた。

川村　馬原さんの追悼文集で、ぼくが書いた「研究の手ほどきをありがとう」は、一年くらい聞き違いでミスがあるんです。馬原君がいる京都にあとから奥さんが来られてだったらしいのだけれども、それを結婚して一年だと思いこんでいたんです。

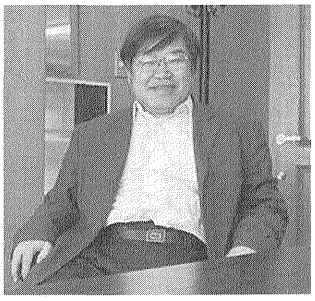
今西　馬原さんのいちばんの貧乏時代ですね。奥さんの小学校の非常勤講師で食べていたんですよ。研究所の給料が出ない月があったそうですから。

川村　それでも、行くたびに泊めてもらっていたよ。長女の穂波ちゃんも懐かしい。初めて泊めてもらった時に生まれましたから。

今西　お二人とも、お客さん大好き人間ですから。私も、道で会って飯食いに行っただけで、今晩泊まっていけ、ということがありました。

川村　日本近代史研究会で、服部之總をはじめ緒先輩にご指導をいただきましたが、とくに編集作業の現場では、宮川寅雄さんから無言のうちに影響を受けました。部落問題の勉強をはじめてからは、馬原鉄男君の影響が大きいです。彼の論文やルポは、むさぼるように読んでいました。京都では馬原君のような研究者に刺激を受けて、朝熊地区では部落の実態に接してショックを受けても、東京に戻って数日すると感覚が薄れてしまうんだよ。ですから、あの頃は枕元に部落問題の本を積んで、部落部落とお経を唱えるようにして寝ていました。

今西　きょうは、貴重な証言をいただいて、ほんとうにありがとうございました。



いまにし・はじめ◎一九四八年生まれ。一九七九年、立命館大学大学院文学研究科修士課程修了。一九九〇年、農学博士（京都大学）。一九九六・二〇〇一年、韓国忠南大学交換・客員教授。主著：『近代日本成立期の民衆運動』（柏書房）、『近代日本の差別と性文化』（雄山閣）、『メディア都市・京都の誕生』（同）、『文明開化と差別』（吉川弘文館）、『遊女の社会史』（有志舎）、『近代日本の地域社会』（日本経済評論社）ほか多数。このように幕末・維新期の民衆史や部落問題が「専門」であったが、最近は、なぜか還暦を過ぎて樺太史や戦後史をやっている。私の経歴や著書については、「ウィキペディア」に載っているし、論文は、小樽商科大学の図書館のホームページからBarrelに入って、経済学科→今西 一と引いていただけると読める。以前は「解放令」関係の論文がよく読まれていたが、最近は国内植民地論や一九五〇年代の学生運動史に人気がある。